

$$\begin{array}{r} 1 \\ 3 \\ + \end{array}$$

## 二年前

「大丈夫、こわがらなくていいよ。僕はユーリ。ロシアから来たんだ。君の隣にいるのは、デジモンだろう？ 僕の後ろにいるのもデジモンさ。見た目はぜんぜん違うし、僕の方が大きいけどね。僕と君はパートナーデジモンを持つ仲間なんだ。」

君が今家族のところへ戻れないのも知ってる。辛い目に遭ったと聞いてるよ。でももう大丈夫だから。これから安全に暮らせるところへ行くんだ。

もうすぐ迎えが来る。すつごく頼りになる人たちなんだ。今までなんども世界を危機から救ってきた。僕と年はあまり変わらないけどね。

ニッポンって国は知ってる？ そこから来るんだ、いい人たちだよ。ヤガミタイチさんと、イシダヤマトさん」

北欧のある国の山奥。街灯もなく山に沿って道が一本通っているだけ。その道から少し登ったところに洞窟がある。その前に巨大な昆虫型のデジモンがじっと待機している。ユーリのパートナーデジモン、クワガーモンだ。遠くからエンジン音が聞こえてきたのはそれから三時間後だった。

「ユーリ、遅くなって悪かったな！」

ライトの光芒の奥から人影と、小さな影が近づいてくる。最初に声をかけたのはアウトドアショップで買った、ざっくりとした青い防寒パーカーの八神太一。そして小さな影は

「おつまたせー」

オレンジ色の小さな恐竜のようなデジモン、アグモンだ。

車の反対側、運転席からは黒い革コートを着た石田ヤマトが出てきた。後部から青い毛皮をかぶったデジモン、ガブモンが続く。

ユーリが洞窟の入り口まで来た。

「太一さん、ヤマトさん」

ヤマトは襟を合わせた。

「うー寒い、早くゲート開けるとこまで戻ろうぜ」

「オレの毛皮貸そうか、ヤマト」

「いいよガブモン。それより」

英語に切り替えてユーリに向いた。

「その子、言葉は」

「英語ならなんとか通じるみたいですよ」

太一もそれくらいならわかる。

「よかった、任せたぜヤマト」

「おい」

「英語なら伊織もできるだぎゃー」

車後部から直立したアルマジロのようなデジモン、アルマジモンが降りてきていた。その奥の少し古めかしいコートを着てる火田伊織は戸惑うように答えた。

「え、まあまあ」

世界中に増加中のパートナーデジモンを持つ子どもたち。すでに子どもでなくなった世代も出てきているので、総称としてパートナーヒューマンと呼ばれるようになり、PHと略される。年に二倍の速度で増加している彼らは現実世界でトラブルに遭うことも多くなった。犯罪に巻き込まれる。政府に軍事利用しようとする。宗教的な問題も出てきた。

たいていはパートナーデジモンをデジタルワールドに送り返すことでなんとかなった。デジモンがいなければPHはただの人間で、特殊な能力があるわけではない。だがなかにはパートナーデジモンを持つということだけで異端視され、家族や隣人に迫害される場合も出てきた。

太一たちはそういう生家で暮らしていけなくなったPHを救出する活動をしてきた。それは太一が高校の頃から少しずつ始め、数年の間に次第にシステム化されていった。

泉光子郎が世界中のPHと連絡して情報を集める。危険な地域の場合も多いので戦闘力に優れたデジモンをパートナーに持つ太一とヤマトが乗り込む。デジタルワールドへのゲートを開く能力を持つ大輔たち六人のうち一人が随行してゲートを開く。

助けられた子どものメンタルケアも含めて、空やヒカリが救出された子を受け止め、生活を整える指揮をする。最年少の伊織は高校生になってやっと参加が認められ、ゲートを開くために同行してきていた。

太一たちが来るまでの間だけ少年を保護するという役目が終わり、ユーリはクワガーモンにまたがった。

「じゃ、あとは任せましたよ！」

伊織が手を振る。

「ありがとうございます！」

クワガーモンが飛び去り、太一たちの車は山道を走り始めた。

後部座席で伊織が英語で優しく少年に語りかける。

「君、名前は？ 僕は火田伊織。十六歳だ」

名前は知っているのだが、あえてそう話している。

「前の席、運転してるのが石田ヤマトさん。隣が八神太一さん」

ヤマトは前を向いたまま隣へ話しかけた。

「太一も英語くらいしゃべれるようになってよ。就職にも有利だぞ」

「わかってるよ。フランス語なら少しはいけるんだけどなあ」

「？ あ、うちの爺さんとこ行ったんだっけか」

「それよりヤマト、免許もつてるとは知ってたけどちゃんと国際免許まで取つてたのか」

「爺さんの遺言でな。お前も免許だけでもあればいざとなったらアニメの制作進行に就職もできるぞ」

「やだよ、そんなの」

アグモンとガブモンは最後部、三列目のシートにいた。

突然アグモンが叫んだ。

「太一！ デジモンの匂いがある」  
ガブモンが続く。

「この車じゃないところから」

伊織の横でアルマジモンが後方に向いた。

「ビハインドアスだぎゃ」

伊織もすぐに後ろを見た。街灯も他の街からの明かりもない夜空の奥から鳥の  
ような物が近づいてくる。

「大きいです、ユーリのクワガーモンじゃない」

太一にも見えた。鳥型デジモンの鋭い鉤爪がもうすぐそこまで来ている。

「よける！」

ヤマトがハンドルを切る

「く！」

左にそれる車。鉤爪が空を切った。

黒い鳥型のデジモンはそのまま前方に飛び去る。その先で上昇し、大きく旋回するのを太一は目で追った。

「また来る！」

「くそ！ まだゲート開けるとこまで距離あるぞ！」

太一は後ろの席に顔を向けた。

「伊織、スマホからでもゲート開けるんだよな」

「ええ、ネット接続さえできれば。ですが」

「電波きた！」

伊織のまえに太一の手のスマートフォンがむけられた。

「ゲート開け、伊織。その子とおまえだけでも先に行くんだ」

「でも」

旋回した鳥型デジモンが、横から迫る。

ヤマトは急減速。車の鼻先を鉤爪がかすめる。すかさず急加速。

「くあっ！ 迷ってる暇はねえ！」

「わかりました！」

伊織はゲートを開く機能のあるデジヴァイス、D3を太一のスマートフォンに向けた。

「デジタルゲート、オーブン！」

液晶画面に光がうごめき、まばゆく発光した。ゲートが開いたのだ。

「さ、君から先に！」

伊織がうながす。それまで不安げにじっとしていた少年は小さなデジモンを抱きしめて光に近づいた。その行動に迷いが無いのは危険に対応するのが身についていたのかもしれない。少年は流れる影となって光に吸い込まれた。伊織、アルマジモンが続く。そして光が収まり元の暗さに戻った。

「いっっちゃった」

後部からアグモンとガブモンが顔を出した。

「オレたちはどうするの」

ヤマトはわずかに口元をほころばせている。

「決まってるだろう」

太一が後部に目を向けた。

「いけるな、アグモン！」

「もちろん！」

二人のデジヴァイスが同時に後部に向けられる。液晶画面のゲージが急速に上昇し、車前方から高空まで二本のゲージが一気に駆け上る。そこには人に感知できないデジタルワールドのデータベースとの境界がある。地球全体を薄い雲のよう<sup>う</sup>に覆う見えないネットワークだ。そこにゲージの信号が届くと接触点から光が炸裂した。膨大なデジモンの進化データの中から二つの光に適したものが選ばれ、地表に送り出される。二条の二重らせんが急降下して車体後部に到達、車内に光があふれる。信号はアグモンとガブモンに回転をもたらし、形態情報が書き換えられ、質量まで呼び込む。

「アグモン進化」

「ガブモン進化」

疾走する車体のバックドアが開き、あふれる光芒の中からアグモンだったものが飛び出した。地上に着地するまでに数倍の大きさとなる。

「グレイモン！」

続いて飛び出したガブモンだったものが大きな狼のような形に変化した。

「ガルルモン！」

後方から近づいていた鳥型デジモンに二体はそのまま飛びかかる。鳥型は鉤爪をふるい、大きな翼を羽ばたかせてなんとかグレイモンたちを振り払った、が。

「メガフレイム！」

グレイモンの口から放たれた火球が直撃した。ふらつき、山間に下降していく。その上にガルルモンが跳躍してきた。口から青い炎を吹き出す。

「フォックスファイヤー！」

炎はかろうじてかわした。しかしガルルモン本体がのしかかり、もつれ合いながら森の中に落ちる。グレイモンも追って森に入っていく。奥で戦いが繰り広げられているのだろう、何本もの木がちぎれ飛び、炎や光がこぼれる。

山裾を大きく回る道の先からもその光が見えた。すぐに決着がつきそうではないことを太一は察した。

「完全体か」

運転の手を止めないままヤマトが答える。

「もう一段進化いくか」

「いや待て」

森から鳥型が飛び出してきた。姿勢が不安定だが、外傷はそれほどでもないらしい。グレイモンたちが届かない高さまで上昇してから向きを変えた。両翼の爪が暗い光を放ち始める。

「やばい！ よけろ、グレイモン！」

発射されたエネルギーが森の一角を瞬時に炭化させた。しかしそこにはもうグレイモンたちはいない。反撃の火球と青い炎が、焼けた森の両側から鳥型に飛んでいく。

グレイモンとガルルモンの共闘の歴史は長い。絶妙に避けきれない二方向からの攻撃で鳥型は右翼と尾羽にダメージを受け、ふらつき、きりもみしながら下降していく。だがその落ちる先の空間が歪み、別の光景を映しはじめた。その先は昼間の明るさだ。

「ゲートだ」

太一が見てる間に鳥型デジモンは明るい空間に飛び込んでいった。そのゲートはそこで閉じなかった。山裾をすると上昇し、太一たちの車に近づいてくる。

「やばいぞヤマト」

「わかってる！」

全速で走る車に、グレイモンたちが駆け寄ってきた。この速度ならゲートには追いつかれるはずがない。ところが横から近づいていたゲートが、急に移動し、車の前方にまわった。夜道の向こう、明るい空間に太陽が見える。車もグレイモンたちも急には止まりきれず、そのままゲートに入ってしまった。

光に目が慣れてきた。

周囲を見回す。

砂漠だった。

多少の起伏と、何かわからない構造物のようなものがいくつつかある以外は、見渡す限りの砂漠に太陽が強く輝いていた。

「どこなんだよ、ここ」

「あときは参ったよなあ」

もちろんその砂漠がデジタルワールドであろう事はわかっていて。そうはいってもデジタルワールドも広い。そのどのあたりなのかは全くわからない。それでも光子郎たちに連絡がつけば問題ないと、気楽に考えていたのだが。

「結局三日もかかったもんなあ」

それからもう二年かと思いつながら太一は冷たいお茶のグラスに口をつけた。

「まあこちらは大変でしたから」

太一の向かいに座った井ノ上京（いのうえみやこ）のグラスはアセロラドリンク。ポケットの多い赤いジャンプスーツと合わせたのかもしれない。

「いまだにデジタルワールドとの連絡の接続が切れた原因はよくわかってないし、多分その後の震災の前触れのなにかが影響してたと思うんですけど」

お台場の対岸、芝浦の倉庫街の一角。周囲に比べるとやや小ぶりで、そのわりに頑丈そうな倉庫に、よく見ると「泉研究所」と看板が出ている。泉光子郎が所長を務める研究所だ。その応接室に太一はいた。

京はまだ大学生で、正式にはこの研究所の所員ではなくバイトの立場だが、所長ともう一人の所員が研究に没頭してばかりいるので実質的にいろいろな雑務をほとんどこなしている。常に何かしらの道具が入ったボディバッグを離さない。いかにも事務所で殺風景だった応接室がそれなりにくつろげる雰囲気になってるのは彼女が飾り付けや照明を工夫したおかげだ。

「揺れが来たっていつても、何時間もあとだったのに。先に接続に影響したって言うのも変とは思うけどさ」

光子郎たちに原因が掴めないものは自分にわかるはずもない、と太一は諦めている。そもそもデジタルワールドとの連絡がどういう理屈で通じてるのか、いまいちよくわかっていないのだ。

「伊織とあの少年を無事にキャッチ出来てたっていうのは良かったけど」

伊織の聞いたゲートの先はもちろん光子郎が把握してすぐに受取チームに連絡を取った。その後から接続が切れてしまったのだ。

「泉先輩、いや、所長はそのことまだ気にしてますよ。原因わからないとイライラするらしくって」

「まあしょうがないよなあ、そういう性分だし」

今も研究の途中で手がはなせないからと待たされたままだ。

「揺れたあととは接続どころじゃなくなってる」

京が思い出話を続けた。太一も後から聞いてはいる。

二年前のその日。太一、ヤマトたちがデジタルワールドの砂漠に迷い込んでから数時間後。こちらの世界を厄災が襲った。関東から東北にかけて大規模な地震が起き、津波も発生した。その時はまだ今いるこの芝浦の研究所が開設したばかりだった。電話や交通網も不安定になっていく中、武之内空や城戸丈、一乗寺賢がここに集まった。自分たちはどうすべきなのか、話し合った。

災害で困っている人がいる、すぐにでも助けに行くべきと主張したのはたまたまアメリカから帰国していた太刀川ミミだった。

彼女はその十年前、二〇〇一年のニューヨークで大きな事件に遭遇している。そのときアメリカ中のパートナーデジモンを持つ子どもたちが集まり、瓦礫から人を救出する助けをするのを見ていた。光子郎がオンラインで連絡を取ってはいしたが、直接会う機会がないままだったアメリカの仲間とはそうして知り合った。言うまでもなくデジモンは普通の人間にない力をもつ。それですこしでも役に立てればと集まったのだが。

「全体から見れば大した効果なかったかもしれない。でもできることをやろうとしたのがよかったのよ、ってミミさん言ってる」

今の自分たちもなにかやらなきやとミミは焦っていた。

しかし、彼らのデジモンはみなちようどデジタルワールドに帰っているときだった。

デジモンたちはずっとこちらの人間世界にいると少しずつ体調が悪くなってしまう。ある程度定期的にデジタルワールドに戻らなければいけない。自分たちだけでできることは限られてるが、デジモンがいれば。そのデジモンたちと連絡がつかないのだ。

城戸丈は慎重論をとなえた。今行っても自分たちにできることは多くない。仮にデジモンに頼らずボランティアに向かうとしてもそれはそれなりの準備も交通手段も必要だ。気持ちだけで行っても何もできないばかりか邪魔になるだけかもしれない。何より彼らはただの学生でしかない。

そうしているうちに津波の被害が知らされてきた。自分たちにもたらされたデジモンという力は、こんな時に何もできないものなのか。彼らは徒労感に包まれてしまった。

「あんなとき、太一さんや大輔くんがいればみんなの気持ちもちよっと違ったんでしょうけど」

本宮大輔と高石タケルは伊織と少年の救出に、八神ヒカリはそのバックアップにデジタルワールドへ行っていた。

「やっと帰ってこれたとき、みんな暗かったもんなあ」

太一は思い出して微妙な表情をしていた。太一とヤマトはそれはそれで大変な目にあっていたのだが、それはまた別の話になる。

「で、あの震災」

「そうそう、太一さんたちはともかく、日本にいてあれを知らないなんてことありえないでしょう。まして東北にいて」

「そいつ、知らないって言ってたんだ」

京が言ってるのは昨日ここに現れた人物のことだった。

「ほかにもなんだかおかしいっていうか、気になるっていうか、ズレてるいろいろな出てきちゃって」

「とは言ってもそいつと会うの、初めてじゃなかったんだろ？」

「去年の今頃、一度だけ。ええと、太一さんたちの世代の人はだれも会ってなかったんですよね」

その人物と会ったことがあるというのは、京と大輔、タケル、賢、ヒカリ、伊織の六人だけだった。

「私たちもそれぎり見なかったのがまた来て、でもどうも」

去年会った時の記憶が、京たちとその人物とでかなり食い違いがあった。

「私や大輔くんたちはだいたい同じで、彼一人だけ違うこと言ってる。でも、数の力で押し切っちゃうのもおかしい。話聞いているとそれまで暮らしていたっていうところの住所も見つからなくて」

「それで現地に行ってみよう、ってタケルが連れてったのか。東北まで」

「ちょうど丈先輩のお兄さんがあちにいるからって」

「シウさんかあ。タケル、妙に話が合うみたいなんだよな」

「まあタケルくんが連れ出したわけはそれだけじゃあないんですけどね」

雪はかなりなくなったとはいえ青森はまだ寒い。

町から少し山側に登ったところで止めた車から、なにもない野原に足を踏み入れた城戸丈の次兄、シュウが振り返った。

「ここで間違いないんだね」

君の言ってた住所、暮らしていたというところは。

シュウはひよろりとして頼りなさがいつまでも抜けない丈に比べると、ややがっしりして背も高い。軽く見える上着は見た目よりも耐寒性能に優れている。フィールドワークに向いたものだ。内蔵されたポケットには大きく丈夫なノートがはいつているが外見ではわからない。

そのすぐ後ろについてた高石タケルも振り返る。薄い上着に厚手の長袖Tシャツという身軽な服装に見えるが、ブーツだけはしっかりしたものを履いていた。

「そうだね、ルイくん」

前日に研究所に現れた青年、大和田ルイは車の横で呆然と立ち尽くしていた。野原の先に彼が暮らしていた親族の家があった形跡など、かけらもなかった。

「震災のこともそうですけど、京くんたちと出会ったときの記憶、それより前の光が丘の記憶がそもそもおかしかつたんですよ」

やっと研究室から応接室に来た泉光子郎が紅茶を一口飲んだあと話しはじめた。

「ずっと光が丘に暮らしてたって言ってたんだな」

太一は珈琲にしている。本当はビールに行きたいところだが、光子郎の話聞き終わるまではそうもいかない。そもそもこの研究所にビールはあつたけ、と思いつながら話を聞いていた。

「そう、十年前、二〇〇三年まで。なのに、彼が戦うデジモンをみたのはその二〇〇三年の春、テレビ越しが初めてだったというんですよ」

一年前、そのルイと京や賢、大輔たちとルイが出会った時、東京タワー近くに巨大なデジタマが出現していた。ルイと大輔はそのデジタマに乗り込んだ。

「で、小さいときのおれとヒカリを見たんだ」

デジタマの中で大輔は光が丘の過去の映像を見ていた。

「それで大輔くんはそのデジタマの中にある世界が一九九五年の光が丘だと思っ  
たんです」

その後にルイの家庭の様子、ルイがデジモンと出会ったことも見ている。

「でもその後のグレイモンとパロットモンのことは知らない」

「次にルイくんが覚えてる、自分と関係ないデジモンのことはお台場のニュー

ス。アーマゲモンと戦った、二〇〇三年春のことです。その間に一九九九年夏に

光が丘で起きたマンモンとバードラモンの戦い、二〇〇二年の年末にやはり光が

丘であった戦いも知らない」

「さすがに無理がありそうだな。もう小学校も高学年だろ？ほんとに光が丘にい

なかつたか、別世界の光が丘にいたか」

「まだ別の解釈もできます」

「ほお、どんな？」

「ルイくんが言ってたウッコモン。すべての人にパートナーデジモンをもたらす能力」

ルイによれば一九九五年にルイのパートナーとなったデジモン、ウッコモンは、ルイの願いを叶えるために世界中の人類にパートナーデジモンをもたせるところにした。

「ただのデジモンにしては大きすぎる能力ですが、ぼくたちもデジモンのすべてを知ってるわけではないから可能性はゼロではありません。でもそれはルイくんが聞いただけの話で何も傍証がない」

そもそもウッコモンがいわゆるただのデジモンなのかどうかも怪しいが、と前置きしてから光子郎は続けた。

「願いを叶える世界、というより形にすることができるとあることは、ぼくたちも知っています」

二〇〇二年の暮、大輔たちがベリアルヴァンデモンと対決していたのがまさにそういう場だった。

それに近いことは光子郎たちも覚えがある。最初にデジタルワールドに行った時、電源がなにもない場所でパソコンの電源が入ったり、柔らかいはずの帽子が固くなったりという現象が起きた。だがそれはデジタルワールド全体の不可思議さの中ではそれほど気にすることではなかった。

「願いを叶える能力、という漠然としてますが、デジモンを生み出す能力くらいならそういうこともないとは言えない」

これまでも想像以上の能力を持つデジモンたちを何体も見てきている。

「ただ多分べらぼうなエネルギーが必要で、まして量産するとなるとんでもない作業量になります。とてもいちデジモンができることとは思えない。」

それよりはルイくんにはそれは自分がやったことだと思わせるだけのほうが実現性が高い」

「騙したってことか」

太一は言うてからそれも少し変だ、と思い直した。

騙したというのなら、パートナーデジモンの増加は自分の力と思わせることがそれだ。だが、その時点ではそうしたデジモンはいなかった。その後増えていくという確実な予測ができてなければならぬ。

「記憶を少し改変したのかも、です」

「なんの」

「まずは年代の」

ここからは仮説でしかありませんが、と光子郎は続ける。

パートナーデジモンがこれから増えるのを知っているのではなく、すでに増えつつあるのを知っていればその後も増えるという予測は立てやすい。

ルイの記憶で一番動かせないことの一つは誕生日だろう。うるう年の二月二十九日生まれ。大輔たちと同じ学年というから一九九二年生まれのはず。

「もしそれがひとつ後ろにずれていると、一九九六年生まれとなる。生まれたのがその年なら、説明がつきやすいこともあるんです」

九六年生まれなら九五年や九九年のことを何も知らなくても不思議はない。二

〇〇二年の暮のことは微妙だが、それでも六歳だ。

「じゃあ大輔が見たっていう一九九五年の光景は」

「大輔を目撃者にして僕たちにトリックが仕掛けられたとしたら」

「トリック」

「そもそもがデジタマの中で見ただけの過去の映像なんです。それもわざわざ大輔くんに見せるための素材を選んでるみたいですよね。

二〇〇三年春のアーマゲモンとのニュースは本当にテレビで見たのでしょうか。もしかしたらそれがきっかけでルイくんの元にウツコモンが現れたのかも。そして記憶を改竄することになった」

「その仮説も証拠はないんだろう？」

「ルイくんの記憶でもう一つ確かなことは、両親が生きていないことです。事件性もあるから検索してみたら」

光子郎はパイナップルマークのタブレット端末を操作して、二〇〇三年の新聞記事を見せた。寝たきりの男性と介護疲れしたその妻の死体が発見され、一人息子は目に傷があるものの生きて発見された。

「続報が見つからないので詳しいことはわかりませんが」

息子に傷があるということは無理心中を凶ろうとしたのかもしれない。

ルイの記憶では十一歳のことだ。それが四年遡り七歳となれば、精神的な衝撃はより一層計り知れない。そのタイミングなら記憶を操作する難易度もかなり下がる。ウツコモンは何年も前からルイのそばにいたということにしたのかもしれない。

「そして東北の親戚の家という世界に行くように仕向け、こちらの世界との年齢差を誤魔化すような生活をしてきた。もちろん最初に言ったように、ルイくんのことのがすべて本場で、そういう世界から来たという説も等価値なんです。これという決め手はない。でも今ぼくらの世界としては九九年の事件などをなぜ知らなかったのかの説明がついたほうが信じやすい」

京は感心して聞いていた。太一と光子郎だと会話のテンポがよすぎる。二人とも頭の回転が早く理解力が高いのだ。うっかりするとおいていかれそうになる。ここでやっと補足事項を話す機会が来た。

「ルイくん、大輔や賢くんと同じ学年にしてはひよろつとしてるなあと思つたんですよ。伊織より年下なら納得できます」

「本人が二十歳以上と思つてるだけかあ」

太一は未だにルイを見てないのだ。別の疑問も生まれた。ウツコモンはなぜそんなことをしたのか。

「マヨイガ、という伝承がある」

運転しながら城戸シュウが話していた。

「柳田國男の『遠野物語』で知られたけど、関東から東北にかけてある話なんだ。山の中にある幻の家。それとは少し違うんだけど、さっき行ったところ。青森の八戸は地名としては知ってるだろ。一戸から二戸、三戸と順にきて八戸、九戸、最後が戸来（へらい）。へらいって、ヘブライに似てるだろ。これはキリストが日本に来たという話もあって」

「シュウさん」

後部座席からタケルが話を止めた。

「あ、大丈夫大丈夫、脇道にはそれないから。」

その一戸から九戸までのあいだで、何故か抜けてるのが四戸（しのへ）なんだ。三戸の次の地名は五戸になってしまう」

その四戸に住んでいた、とルイは語っていた。

「江戸時代にはなくなったらしい。だいたい領地の分配とかで地名だけ消えたつてことで説明が付いていることはついてる。でもちよつと変な感じがするよね」

それだけじゃなくて、と続ける。

「そのあるはずがない四戸に関する目撃談というか、体験談のようなものが現在でもたまに出てきてね。それも今回調査の目的の一つだったんだ」

シュウは民俗学の学者で伝承の現地調査も多い。

「助教になったばかりなのに、忙しいですね」

「給料安いしね。おかげでこの車もいつまでも新調できない」

「それにしても」

タケルが少しルイを気にしながら言った。

「本当に何もなかったですね、四戸」

「さっきのあたりと別に四戸城と呼ばれた城跡もあって通り道だから、一応行ってみるけど」

「なるほどな。その、ルイのことは少しはわかった」

研究所の応接室での太一たちの話は続いていた。

「でも、記憶の問題だけで言えば」

光子郎が視線を落とし気味に言う。

「ぼく達も九五年のことはあまり覚えてなかったですからね」

「そりゃまあ、そうだなあ。俺でも小一だったしな」

太一たちは九九年に光が丘を再訪した時に突然思い出したのだった。

京も賢の言ったことを思い出していた。

「賢くんも、悪かった時のことはあまり思い出せないって言うし。でもその前のこと」

賢が別のパートナーデジモンを持った少年と共に何かと戦ったことがある気がする。光子郎もそれは聞いた気がする。

「本当に記憶の問題なのか、それとも」

研究室から来た女性が話しに加わった。

「その記憶通りの世界から、この今の世界に来てしまったのか」

「あー、メノアさんも似た立場でしたねえ」

光子郎と同じ研究所の作業服に、今はショートカットにしている女性、メノアは、京の隣に座って話を続ける。

彼女もルイと同様に今ここにいる太一たちとは違う記憶を持った人間だ。太一と歳は同じなのだが、アメリカの大学でデジモンの研究をする教授にまでなっていた。そして太一たちを巻き込んだ戦いまでした。彼女にだけそういう記憶がある。

「でも私の記憶にある世界は」

一度言葉を切った。

「もちろん、一番違うのはモルフオモンがいたかどうか、だけど」

「メノアさんのパートナーデジモン」

「そのデジモン連れて飛び級で大学の教授にまでなった人間の存在を、イジーが気がついてなかった、そういう世界だったのよ」

「そのイジー、て呼び方はよしてくださって」

光子郎がやつと口を挟む。

「ああ、そうだったわね、社長」

「その社長、も」

「そうそうそうでした。この世界では所長。でも私の記憶にあったイジー、いやイズミ・コーシローは会社の社長だった。まだクセが抜けなくって」

わざと言ってるのが見え見えだがそういう性格らしい。

「それ、泉先輩が社長だったって、そういうったのメノアさんだけじゃなかったですもんね」

「所長でも社長でも、私みたいな存在のことを気が付いてないとか知らないとかのはずがないのよ、この人が。それはここで一緒に研究するようになってよくわかったわ。情報収集量が桁違い」

「まあ、この研究所もメノアさんのおかげで設立できてるわけですし」

光子郎がそういうのは照れ隠しなのかもしれない。実際に設立資金の半分はメノアが負担して実質的には共同経営者なのだが、あくまで所長は光子郎だと言うことにしたのもメノアだった。

「社長になるのと同じくらいの資金は、私の記憶と同じように特許料で稼いでたんだから、そこは間違っていないんだけど。ほかにも」

あまり以前のことを口にしなくなっていたメノアだったが、ルイがきたことで記憶が蒸し返されていたようだ。怪しい助手のことなどいくつか自分の記憶すらあやふやなところがあると例を挙げたあと

「何よりなぜ自分があんなこと思いついたのか、どうしてそういう結論に至ったのか。よく思い出せないのよ」

メノアは少し視線を落とした。

「《大人になったら可能性が狭まる》なんて」

「それにしてもさ」

太一が口を挟んだ。

「日本語うまくなったよなー、メノア」

「でしよう」

メノアはニツコリと返した。

「そうそう、所長だけじゃないわ、タイチたちも」

ヤマトや丈、ミミ、そのときは会ってなかったが空も。

「私知ってる人たち、記憶の中の人たちと今のあなたたちとは、決定的に違うところがあった。ダイスケやミヤコたちもね。それは昨日、ルイくんの話聞いたときにも言ったのよ」

「この人たちなら、あの時」

前日、メノアはルイにこう言った。

元の自分のパートナーデジモンだったはずのものとの決着をつけた時のこと。

「別の解決策を探したに違いないわ。それはたぶん、あなたのときにも」

ルイはその言葉を思い出していた。

四戸城跡、金田一城趾ともいわれる辺りにも自分が暮らしていた痕跡はなかった。それでは自分は今までどこにいたのだらう。去年、大輔たちと会ってあんな事になったというのはどこまでが本当のことなのか。いや、そもそも、両親が生きていたと思ってた頃の記憶はどれくらいが事実なのか。

その様子を見ていたタケルが話しかけた。

「最初にパタモン、ぼくのパートナーデジモンと出会ったときはね」

随分といろんな経験をした。しかしそれは、この世界ではわずか数日のことだった。

「個人的な体感では半年以上か、もっと長い間だった。すごいずれがあつてさ。そのあとしばらくクラスの子と話が合わなくなったりして」

時間よりも精神的な変化のほうが大きかったのかもしれない。

「あの時のことは夢か何かだったのかなあ、そんなはずはないし、そうじゃないほうがいいなあ、みたいなことばかり考えてた。辛いこともたくさんあったけど、いいこともあったからね」

「あの、よかったら」

ルイが数時間ぶりに言葉を出した。

「その話、もっと詳しく聞かせてもらえませんか」

「え、それはいいけど」

「時間はたっぷりあるよ」

運転席からシュウが声をかけてきた。

「何しろこの車で東京まで行くんだ、結構かかる。夕飯には間に合わないかもだからね」

「そうですね」

「それに、ぼくも丈や兄さんから断片的に聞いてるだけだ。まとまった話は聞いておきたいな」

「あ、そうか。じゃあ、あくまで僕の立場から見た話ですが、それでよければ」  
タケルはペットボトルの水を一口飲んでから話し始めた。

「最初はサマーキャンプだったんだ。兄さんの学校が夏休みに山に行くからって、うちの親同士が何か連絡取ってくれて、ぼくもそこに参加することになった」

ルイは長くて短い夏の話の聞き始めた。

「ジュネーブはどうでした」

光子郎が尋ねた。太一は頭の後ろに手を組んで見上げる。

「ああ、それがさあ。全くあの狸おやじども。まあカトリーヌの親戚さんがいたから何とかとりなしてもらってきたけどさあ」

カトリーヌは二〇〇二年の年末に最初パリに行つたとき知り合つた、フロラモンをパートナーに持つ女性だ。フランスの政財界に顔が利く一族らしい。太一は、国連の人権委員会に証人として呼ばれ帰国したところだった。

年に二倍ずつ増えていくパートナーデジモンを持つ子どもたち。彼らがまだ少人数のうちには、アメリカやインドの裕福な家にいるパートナーヒューマンの敷地内、広大な庭や牧場などに生活の場を設けることができた。周辺目をごまかせなくなる前に、その場を少しずつデジタルワールドに移していった。

おそらく地球と同じくらいの広さがあるデジタルワールドには、人はいないが使える建築物も多数ある。場所を選べばかなりの人数が寝起きが可能で水や食料の供給に不便がないところもあった。周辺に危険なデジモンがくる場合もあるが、そこにいるのはパートナーデジモンと共にいる子供たちだ。自分の安全は最低限守れた。そうした保護区が幾つか生まれ、大輔たち以降の世代で大学生位になつてきた者たちが交代で面倒を見るという体制も生まれてきた。彼らもいつもはパートナーデジモンと離れて暮らしているので、たびたびデジタルワールドへ行きデジモンと過ごす時間ができたことが嬉しいという側面もあった。

救い出した子どもの数も増えることで太一たちの救助活動も密かに注目を集めてきた。人間社会からは拉致誘拐犯ではないかという見方も出る。そうした中で国連から接触があり、人権委員会の秘密会議に太一が代表として行ってきたのだった。そしてなんとか非公認ながら国連に活動を認めてもらったらしい。

「向こうにいる間ちゃんとした服装してなきゃいけないのも窮屈だったけどさ」

今の太一はいかにも気楽なパーカー姿だ。

「行き帰りにずいっと飛行機でじっとしてなきやいけなかったのがさあ」

「いつもゲートからデジタルワールド経由ですもんねえ」

口ではめんどくさそうなこと言っても、そんなややこしい大人たちをうまく丸め込んできたのはさすがは太一さんだな、と思いながら京が答えた。

「それよりさっきの話」

太一は光子郎とメノアに少し視線を向けた。

「もう何人目だっけ？ おれたちより前にパートナーデジモンがいたって言うてきたのは」

「直接会ったことがあるのは五人、話だけ聞いてるのが四人、いや五人かな」

「何だか光子郎にしちゃ歯切れ悪いな」

「足すと八人を越えるんですよ。僕らの代が八人。その後の増加数から逆算してそれまでには七人のはず」

光子郎や太一たちがデジモンと出会ったのが一九九九年。その年は彼ら八人だけが新規のPHで、その後は年に二倍ずつ増えている。遡ると一九九八年には四人、その前年は二人、一九九六年が一人で計七人のはずなのだ。

「それが八人以上となるとそこでもう数が合わないんですが、そもそも最初にデジモンに出会ったという年代もおかしいですからね」

「だからイジーは、私たちが平行世界から来たんじゃないかって言う説も持ち出してくるのよね」

メノアが引き継いだ。

「私と、他の人達ではまたそれぞれ別の世界かもしれないけど」

「出会いが一九九五年より前と言われると、現状と合わなくなってしまうです」

光子郎のいう例はメノアやルイとは違う人物たちのことだ。

「それが五人と言われたらなおさら」

「実際にそう言ってるのは一人だけだけだな」

太一のいうその五人のうちの一人は、もう一人の眠る病室にいた。

神奈川県半島の丘にある療養所。周囲を林に囲まれており、町と少し離れてるため訪れる人は少ない。療養所というのさえ仮称で、ちゃんとした病院名があるのだが通ってくる老人たちにはずっと前から療養所と呼ばれている。建物自体が小さいわりに入院室も備えているが、二年前からずっと意識不明の男性が一人ずっとベッドにいるだけだ。

「え、今なんて！」

姫川マキはナースコールを押しながら、ベッドに寝てる男、西島に問いかけていた。

病室の戸が開き、ツンツンした髪をなんとか帽子で抑え込んでる看護師が飛び込んできた。

「どうされました」

「今、しゃべったの。意識が戻ったみたいで」

「先生呼んできます！」

看護師は戻っていったが、西島の意識はすぐには戻らない。

その男、西島は太一たちが高校生の頃、担任の教師だったという。それは偽りの姿で、本当は政府関連の機関の調査官。かつてはパートナーデジモンがいた。太一たちを巻き込んだ長期にわたる事件の後、死んだはずだ。そう語ったのは、ずっと付き添っている質素な服装をした女性、姫川マキだった。彼女も同じ機関に属し、やはりパートナーデジモンがいた。他に三人、計五人が《選ばれし子ども》だったというのだ。

この姫川マキの言う過去の出来事が、光子郎の仮説と矛盾する。太一たちの前の世代なら五人という数自体も多いようだし、それよりも五歳以上離れていて年齢が上すぎる。

数年前、姫川は闇の中へ消えていき、そこで一旦記憶が途切れた。意識がもどつてからは、彼女が所属していた機関など存在せず、死んだと思つた西島が生きていたことだけはわかつた。ただ西島は昏睡状態にあつた。彼がいた病院でそれまでのことを話すと、どういうルートから話が伝わつたのかこの療養所に移るように促された。自分も近くに狭い部屋を借り、通うことになつた。彼女の記憶の中にあることが本当なのか、よく似た別の世界に移動してしまつたのか。どちらにしても何かを解明する鍵は西島で、彼が意識を戻してくれることにしかない。彼女はずつとその時を待つだけだつた。

この療養所は建物だけでなく院長もかなり高齢で、西島と一緒にここにきた若い医師が副院長として主な業務を回していた。

「ほんとかい、本宮くん」

城戸丈の長兄で副院長の城戸シンは、椅子を半分だけ回して横目で見たまま、まだ立ち上がる気配がない。最近かぶる人も少なくなつたナースキャップの傾きを直しながら、本宮大輔の姉・本宮ジュンは答えた。

「ほんとですよ!! すぐ一〇四号室に」

「その前に」

シンは部屋の片隅を指さした。

「君のデジモン、あまりうろつかないようにしておいてくれないかな」

「あゝゝゝ、コドちゃん!」

ジユンはデジモンを持ち上げた。

「あまり人が来ないとはいえ、患者さんが驚いたり嫌がられたりで変な噂が」

「ええ、ええ、わかってます!」

「悪い子じゃないのはわかってるんだけど、その外見がね」

まだ小さいがクモの形をしたデジモンだ。

「そう! 悪い子じゃないんです! だからここでおとなしくしててね」

柵の下に隠して蓋を締め、ジユンが振り向くとシンはスマートフォンを手にしていた。

「とりあえず丈に連絡しないとね」

「すぐ療養所に来てさ」

城戸丈は大きなバッグの中のゴマモンに話しかけた。

「シン兄さんからじゃあしょうがないよねえ。で、何の用なの」

「西島さんが目が覚めたかもって」

「あらずつと寝てた人」

「まあ今日あまり忙しくなくて、ちょうどよかったけど」

丈は研修医だ。勤め先が父のいる病院なので多少の無理は効く。というより、何か起きた時のために便を計りやすいように父が手配してくれていた。息子がパートナーヒューマンということに対して彼なりにできる心遣いがそういう形なのだ。

「目が暮れる前につきたいなあ」

丈はバッグを抱えて駅へ向かった。

「西島さんの意識が戻ったんだって」

デジタルワールドに幾つかある保護区の一つ、穏やかな高原にぽつんとあるコンクリートの塊のような建物の一室で武之内空が八神ヒカリに言った。空は青いスポーツキャップに明るいピンク系の長袖Tシャツ、半袖Tシャツを重ね着してジーンズの上に腰にも長袖を巻いている。何かあったときに人に貸せるような用意だ。ヒカリはパーカーワンプいでポシェットにデジヴァイスが入っている。一見シンプルだが下に七分袖のトップスにキュロットを着用してるので、このワンプも必要な時には敷物に転用もできる。

二人がいる建物は近づいてみると意外に大きい。単一のものでなく、いろんな建物が合体したようだ。香港から来たシャコモンをパートナーデジモンに持つ三兄弟は、物心付く前に解体された魔窟のような建物に似てると喜び、こう呼び始めた。

## 《九龍城寨》

高原の少し上にあるかなり大きな湖から水を引き込む工事は普通ならかなりの人手が必要だったろうが、三兄弟とシャコモンたちの奮闘でかなりの短期間で完了。おかげで現実世界からこの保護区への子どもたちの移送が早められた。デジタルワールドにたまにあることで、この建物も出どころがよくわからない電力を利用することもできる。それで現在収容されてる三十人くらいならあまり不自由なく生活できる。その安定性には疑問もあるので、太陽光パネルと蓄電池を導入、現実世界との通信用のパソコンを備えたのがこの部屋だ。

「すぐまた元に戻ったみたいだけど」

「西島さんのことなら、メイさんに言った方がいいですよね」

「そうよね、あの人たち同じグループだから」

空と同じ年齢の望月芽心（めいこ）通称メイは、パートナーデジモンがいまままこの保護区に定住して、子どもたちの世話をしている。

彼女は姫川マキ、西島大吾と共通した記憶がある。彼らや太一たちといろいろな体験をした、という。空やヒカリにはその記憶はない。

「じゃ、すぐ呼んできます」

「あ、その西島さん」

空が呼び止めた。

「一言だけ言ったって。西島さんが」

空が迷うような目をするのは珍しいとヒカリは思った。なぜそんな目をするのかはすぐに分かった。

「クライウミ、って」

「それって……あの、暗黒の海のことじゃ……」

ヒカリはすぐには動けなかった。

「その海なら」

車の中で長い話を聞いていたルイが、やっと口を挟んだ。

「ぼくも行ったことが。いや、行ったことがある気がするというか。あまりはつきりしないんだけど」

タケルが語る小学生の頃に体験した話は、すでに二度目の大きな事件がおきた二〇〇二年のこととなっていた。春から年末までの出来事で、今は初夏のあたり、普通のデジタルワールドとは違うところに行った時のことだ。

「ぼくも実際に行ったのは一度だけだけどね。ずっと嫌な気分がしてたなあ。あの時だけのイレギュラーなゲートの開き方をした」  
ずっと霧に包まれたような薄暗い海辺の町。

「ぼくとヒカリさんだけじゃなく、その前に賢も行ったというのだけど、やはり記憶がはつきりしないって言ってたよ。大輔たちはゲート越しに見ただけじゃなかったかな」

「ここではなく、その、デジタルワールドでもない世界。他にもそういうところがあるんだろうか」

「君が住んでたはずの町もその一部かもしれないよね」  
運転席からシュウが会話に加わった。

「だとしたら、ちよつと羨ましいかなあ。ぼくはこの世界の他は、デジタルワールドにちよつと行ったことがあるだけだから」

ルイはちよつと驚いた。

「え、シュウさんも行ったことあるんですかデジタルワールド」

「だからちよつとだけだよ、ほんのちよつと」

「シュウさん、その話はややこしくなるから、また後で」

タケルが軌道を戻した。

「続き話していいかな。その暗黒の海にいたのがまた不気味なデジモンで。

いや、ほんとにデジモンだったのかどうかもわからないけどね」

穏やかな口調に何かごまかされてるような気がしたが、ルイは黙って聞き続けた。タケルの語る、太一たちとアグモンたちの物語はそれほど引き込まれるものだったのだ。

しかしそれならば自分は、自分の体験したことは。記憶は。

(もうすこし聞くといいよ)

頭の中に声が聞こえてきた。

(一度区切りが来る。質問はそれからでも遅くないよ)

これが初めてではなかった。数日前からときどき聞こえてきたこの声に導かれて光子郎の研究所を訪ねたのだ。

きみは、だれだ

(ほら、今いいところだ。一乗寺賢のことがわかるよ)

そうだった、ここまでのタケルの話に出てくる一乗寺賢はルイの知るいつも穏やかで優しそうな賢とはかなり違ってゐる。今それが大きな転換点を迎えようとしていた。尋ねたいことは後でいい。ルイは聞き入った。

「それはお疲れさまでしたね」

一乗寺賢は黒革のライダースジャケットの前を開いてやっつくつろげたようだった。

「まあなあ。そっちも警察のお偉方に引き合わされて大変だったって聞いたぞ」  
太一が京をちらつとみる。

「おかげで就職活動はしなくてよくなったみたいですけどね」  
京が賢の代わりに答えた。

「えっと、それは。でも、上の方の人とはほんとに最初の一回だけで、その後は直接の上司になる予定の人とだけですから」

「予定、か。デジモン犯罪捜査課」

「まだこれから新設されるので、仮称ですよ」

「ほんとに作るんだなあ。まあこれからは必要になるのは確かだけど」

「政府だか警察だかもそれなりにデジモンのこと調べてるのよねえ」

京は、デジモンだけではなく自分たちのことも、とは言わないでおいた。

「賢に目をつけるのもなるほどってカンジするし」

デジモンを悪事に使うことを最も忌諱しているのが賢だ。かつての自分がしたような過ちを他の人達にさせたくない。もしそういう行動に出る人がいたとしても、できるだけ早いうちに収めてしまいたい。その気持ちはこの仲間の中でおそらく一番強い。

「たぶん、ステイングモンがあまり大きすぎないことが、捜査に向いてると思われたんだと思うよ」

賢を選んだ側は誰のデジモンが進化するとどれくらいの大きさに成るかまで把握してるとのことだ。

「謙遜するわよねえ」

太一はやや居心地が悪くなってきた。

「まあ町なかでいきなり大きな成熟期が活動するわけいかないなあ」

「あの、ところで」

賢は何とか話題を変えようとする。

「光子郎さんたち、遅いですね」

「城戸シンさんからの知らせをあちこちに回してくるだけっていつてたんだけど」

あの二人はほっておくと何かのきっかけで議論を始めていつまでも終わらない。いまもそうにちがいない。

「ちよっと呼んできますね」

京が行ってしまったので、今のうちにデジタルワールドに回線繋いでもらってワームモンの顔を見たかったという賢の希望は潰えた。

「賢ちゃんにもこれ食べてほしいなあ」

賢のパートナーデジモン、ワームモンは短い手(?)で器用に箸を操りラーメンを食べている。大きなイモムシのようなという気味悪がられそうな外見だが、愛嬌のあるくりっとした目が好感をもたらしている。

「うめえだろ。今日のだしは特製だからな」

本宮大輔は得意そうだ。

「また腕上げたよね、ダイスケ」

大輔の隣の席の犬のようにも見えるが小さな竜型の青いデジモン、ブイモンも得意そうだ。

遠くに雪をかぶった山々が見える。反対側には熱帯のような密林がある。その間の平原をまっすぐ貫く線路があるが、なにかが通るのを見たものはいない。

線路には短い支線があり、その先に風力発電のブレードがゆっくり回っている。太い電線がかなり大きな石造りの城壁のような建物に続いている。大輔たちはその中庭にいた。大輔はスタジャンにサングラスを頭の上に引っ掛けている。

デジタルワールドにいくつかある保護区のうち、北米、英語圏出身者の多いここでは食事も欧米風に近い。主食はジャガイモやトウモロコシ、そしてパンよりも工程が少なくて済む上に保存も効くパスタ。そのパスタを利用して始めた大輔のラーメンは好評だった。いわゆる動物はこの世界で見ることはないが、川や湖に魚はいる。大輔はそれをただ調理するだけでなく出汁を上手く取ることもできるようになった。そのうちに具も増えるようになり、今日の丼の中にはキノコを炒めたものが入っていた。

「あたしのヒントも良かったでしょ」

太刀川ミミもにこやかだった。大きめのロングTシャツにデニムのベスト、ミニパンツで膝上までのブーツを履いていた。大輔同様、活動のしやすさと防御性を考慮している。

キノコはミミのアイディアだ。この世界のどのキノコが食用に適しているのか、それを判別する能力に長けてるのはミミのパートナーデジモン、パルモンだった。緑色の植物のようなパルモン本人はラーメンは食わずに中庭の中央で日光浴で光合成をしている。その横で日向ぼつこのまま眠っている白く耳の大きなデジモンがいる。テリアモンだ。テリアモンのパートナー、ウオレスは大輔たちと同じテーブルを囲んでいる。すっかり箸に慣れて器用にラーメンを食べていた。

「さっきの連絡、その、ニシジマって人のことはいいの」

大輔はちよつと困った顔をする。

「まあ、オレは会って話したことがない人だしなあ」

大輔が初めて見た西島は意識がなくベッドに横たわった姿だ。その時、そばには姫川マキと望月芽心がいた。彼らの話の中では大輔や伊織たちは行方不明ということになっていた期間がかなり長かったらしい。

ミミの立場は違った。

「わたしは会ったことはあるはず、なんだけど。なんだか曖昧で」

芽心の話ではミミや太一たちは一緒に行動していたことがある。ミミは確かに芽心に前にあったことがあるような気はするのだが、彼女が言うような大事件に遭遇していたとしたら忘れるわけではない。

「曖昧なのはぼくと同じか」

ウォレスが口を挟んだ。ミミとは逆に、ウォレスと大輔はその前にあったことがあるはずなのだが、それはまた十年も前の話。

「そういうなよ、ウォレス。なんか仲良くしたってのは覚えてるんだから」

アメリカに保護区のもとになる場所を開いて間もない頃、アメリカのPHの一人マイケルの家をウォレスが訪れてきた。マイケルの父は有名な映画スターで、広大な牧場を所有してその一部を保護区としていた。それがちょうどデジタルワールドに移転した後だった。ウォレスが昔会ったことがあるというので大輔が呼び出された。

「あんどとき、初めて会ったって気はしなかったもんなあ」

だが彼のいう、一緒にした冒険のことははっきりとは記憶にない。アメリカを舞台に大輔たちとの旅や強大なデジモンとの戦いもなんとなく覚えてるような気はするのだが。それは京や伊織たちも同様だった。

「オレも、マグナモンになったとき、初めてじゃない気がしたよ」

ブイモンもそういう。だがそれ以外の記憶が曖昧なのだ。そもそもその頃はデジタルワールドでデジモンカイザーとの決着をつけてた頃。その前後のいつにアメリカまで行ったのか。それもゲートでなく、わざわざ飛行機で。

「わたしもちっちゃくなつた記憶があるような気もしなくはないけど」

ミミや太一たちはその時にウォレスに会ってはいない。代わりに幼く戻されてたという。そのせいであまりよく覚えていないのか、それともそれが本当の記憶なのか、そうでないのか。ウォレスも別世界から来た可能性があると光子郎が言っていた。彼がこの世界に来たときにもたらされた元の世界の大輔たちの記憶までが一緒に移ってきたのかも、と。

「それが記憶のすれ違いの最初の例だったわけ？」

研究所の一室で光子郎とメノアは立ったまま会話していた。

「ウオレスの例、メイたちの例、わたし。そして今度のルイ、ね」

「一乗寺くんから聞いただけの例もありますよ」

「あれが一番謎、というか、少しシチュエーションが違いすぎるわ」

「記憶のことはその前にもう一件あります」

一九九五年光が丘で大きな爆発が起きた。ガス漏洩による事故として処理されたが、実際はグレイモンとパロットモンの争いによるものだった。太一たち八人はそれを目撃していた。にも関わらず、そのことはすっかり忘れていて、四年後光が丘を再訪、東京に侵攻しようとしていたデジモンとの戦いの際に思い出した。最初の事件のことを忘れていたのは自分たちが小さかったからなのかとその時は思っていたが。

「大きな事件や怖い目に遭うと、その記憶を自分で封印してしまうというのは割にあることだそうですね。心を守るため。光が丘のこともそういうことと思ってきましたが、その後の例との関連も考え直してみたほうが良さそうですね」

「記憶の封印と、記憶のすれ違いは質が違うように思うけど」

「メノアさんたちの場合は記憶のすれ違いなのか」

「別世界から来たのか。そこは前から言ってることよね」

「ぼくたちが別世界に行ったという記憶の例もあるし」

「それもこの世界の時系列でどこに入れたらいいのかわからないものなんですよ、これが済んだら一度整理してみなくちゃね」

「記憶の問題と言ってるけど、情報系の問題と絡んでるはずなんです」

「イジーが気にしてる、デジモンとは何か、どうして別世界のものがこの世界で質量を持ち、『進化』の際にそれが増減できるのか」

「メノアさんの研究、デジタルワールドはただの別世界なのか、というのと根本は同じはずなんです」

「ルイが来たことでぶり返しちゃったわねえ」

「西島さんが意識取り戻したのも偶然じゃないのかも」

ドアが開いて京が飛び込んできた。

「あくもうやっぱり。いつまで話してるんですか、連絡終わったんでしょ。賢も来てますよ」

応接室に戻る廊下でも光子郎とメノアはまだ話を止めない。

並行世界や別宇宙は存在するのか。するとしたらどこに、どのように、という問いに対する答えにこんなものがある。

「光子郎さんの言ってたことを、ぼくなりに理解できたところまで、という前提で。文系が理解するには限度あるからね」

長い車の移動の途中、休憩で入った道の駅の食堂で、タケルはルイに光子郎の仮定を話し始めていた。シュウは運転席で仮眠している。

「物質を構成する原子。あるいはその原子を構成する原子核と電子。その大きさは漠然とイメージするよりも相当に小さい。太陽と地球の間の距離に野球ボールとゴマ粒おいたと考えてみて。正しい比率じゃないけどイメージできる分としてはそのほうが近いらしい」

タケルは自分の前に置かれた胡麻団子から胡麻を二粒取り、テーブルの両端においた。

「これよりもっと離れてる」

それだけの距離が離れても一つの原子であると振る舞えるのは、物理学ではいろいろな名前をつけているが、要はそこに約束事。契約のようなものが取り交わされているから。実際はその間に別の素粒子が入り込んできても契約がなければ別に作用されない。

「でももしその間に実はたくさんさんのゴマ粒があつたら」

胡麻団子の皿を二つのごま粒の間に置いた。

「この皿がもつとたくさん」

びっしり埋めるとそれこそ無限と言つてもいい位の数になってしまう。それぞれが別の約束事で結びついているとしたら、それこそが別宇宙なのではないか。原子の約束事とその矛先を隣り合った素粒子のどれかに変えることができたなら、別の原子になることもできるかもしれない。その約束をこの世界に留めているのは情報だけだ。ある程度まとまった量がその情報系を隣のものに書き換えたら。

「たくさんのゴマ粒を結びつけていた糸を、別のゴマ粒に通してみるというようなことかな。それが別世界に行くということなのかもしれない」

ルイは突然の話に上手くついていけない。タケルはかまわず続ける。

「この話の面白いところは、デジモンたちが何故この、僕らの世界で体を持つことが出来るかを説明できそうなどころなんだ」

次元が違うとか別世界とかの遠そうなどころではなく、この空間にあるのになると認識されてないたくさんの素粒子。それに情報を与えて、こちらの世界で認識出来るようにすれば。

「そこになかった質量が出現することになる」

タケルは爪楊枝を胡麻団子に刺した。

「え、それはもしかして、デジモンの進化も」

「そう。わかりが早いね。デジモンたちは進化するときには大きさもかなり変化する事が多い。元の質量の何十倍にもなることも。それを何処から持ってくるよ  
りも」

爪楊枝を刺した胡麻団子を持ち上げる。

「ここにあるけど認識されてないゴマ粒に糸をとおして、こちらの世界に借りてくるほうが早い。ほんとはそこにダークマターとか、ダークエナジーとか、量子論とか弦の振動とかも絡む話らしいけど、ぼくにわかりそうなのはここまで」

光子郎はこの質量の問題に意識、記憶も関係してるのではと考えているようだった。

タケルはタケルで、九五年に光が丘で事件を目撃した子どもたちの内、数年後にお台場に引っ越したものがデジタルワールドに呼ばれたのか、デジタルワールドに呼ばれることになっていたからお台場に引っ越すことになったのか。その因果関係についての疑問も持っていた。それは光子郎の興味の範囲から外れているので、自分でいつか解決すべきものだろうとも思っている。運命とかあるいは神の存在にも関わることもかもしれない。

「そのうちもつと。いろいろわかるようになるといいなあ」

「あの時のヤマト先輩、よかったですよー。

今にも自分が殴りかかっていきそうで」

京が話しているのは前夜、この光子郎の研究所にルイが現れて話したことを後で聞いたヤマトのことだ。

「俺たちとデジモンの結びつきの始まりが、そんないい加減なことがきっかけだったのか。ふざけたことを。太一がジュネーブに行ってる間で良かったな。あいつがいたらただじゃすまなかつたぞ、とかってもう大変で」

「ヤマトは何でもオレのせいにしたがるの良くないよなあ」  
太一はやれやれと受けながす。

賢も来たので太一、光子郎、メノア、京で前日のことを最初からおさらいしていた。

「もう一つ大事なことがあるでしょ」

そこまですつと聞いてるだけだったメノアが話した。

「ルイと、私。それにモチヅキメイも」

太一はメノアをまっすぐ見ている。

「パートナーデジモンと出会ったのはデジタルワールドじゃない、ってこと」

太一たちや、大輔たちはほとんどデジタルワールドへ行ってからそれぞれの

パートナーデジモンと出会っている。ヒカリという例外はあるにせよ。ベリアル

ヴァンデモンを倒した後にパートナーと出会えた、暗黒の種を植え付けられてい

た子どもたちも、その出会いはデジタルワールドでだった。

「二〇〇三年以降はそういう例も少しずつ増えてきてますけどね」

光子郎はタブレットのカバーを閉じた。

「遡ると大輔たちと二〇〇二年の夏に冒険をしたというウォレスもたしかそうです。

出会いはデジタルワールドじゃない」

「なにか意味があるのかなあ、そういう別世界にいたかもしれないPHが現れてくるのは」

「しかもみな、現状ではパートナーデジモンを失っています」

芽心、メノア、ルイ。彼らのパートナーデジモンは今はいない。彼らの記憶ではそれらは太一や大輔たちが倒したものである。

やはりずっと聞いていた賢が光子郎に向けた。

「ところで、さっきの仮説。ルイくんの年齢とか記憶に関すること。随分デリケートな話だとおもうんですが、ルイくん本人には」

「ああそれが」

答えかける光子郎を京とメノアが椅子から立ち上がらんばかりの勢いで遮った。

「所長本人が言うのは全力で止めました！」

「イジーに言わせちゃ台無しよそんな話！」

「じゃあぼくがゆっくり話ししてくるよ、ってタケルくんが言って」

「それで突然東北まで行くことになったのよ」

「そういうことだったのかあ」

太一はまた頭の後ろに手を組んだ。今日何度目だ、この姿勢、と思いながら。

「そんなにぼくが話すのは良くないでしょうか」

光子郎はいまいち納得できてない。

「まあそれがわかってないのがイジの良いところでもあるんだけどねえ」

「ミミさんも前にそんなこと言ってましたよ」

よくこの研究所はうまく運営できてるもんだな、と太一は関心していた。

「丈、重くない？おいら自分で歩けるよ」

「大丈夫だよ、小学生の時でもちゃんと持ち歩けたんだから」

何か事故があつたようので電車が止まってしまい、城戸丈はゴマモンの入った鞆を肩から下げたまま海沿いの道を歩いていった。

「やっぱり暗くなる前には着けそうもないなあ」

太陽はかなり低くなつてきていた。

「京くん、ゲート開いてもらえますか。そろそろテントモンにこちらに来てもらいます」

応接室でタブレットを見ていた光子郎が顔を上げた。

「前兆来てます？」

「まだすぐというわけでもなさそうですが」

その目に緊張が走ってるのが太一にはわかる。

「どの辺に来そうなんだ？」

「この研究所近くと、保護区のうち二つ。空さんたちの九龍城寨とミミさんたちのアラモ砦。他に反応小さいですが神奈川の療養所と、もう一つは。福島あたりを移動中で計五箇所か」

「そんないつぺんに」

京が眉をひそめた。

現実世界でデジモンが活動するとデジタル機器に障害をもたらす現象がある。成長期までならそれほど支障は無い。成熟期デジモンがなにかしらの技を放つと周辺に影響し始め、完全体以上では存在するだけでノイズを撒き散らす場合がある。そのノイズの周波数はある程度特定できてきた。それを観測することで遠隔地からでもデジモンの存在を検知することが可能になりつつあった。この研究所の研究課題の一つだ。

デジタルワールドではある種のデジモンたちのみの検知が試みられていた。観測は各地域の友好的なデジモンと、ゲンナイたちエージェントを通じて「デジタルワールドの安定を望む意志」ホメオスタシス」との連携でネットワークを構築中。テントモンはその中心にいた。

デジタルワールドとこちらの世界、両方におそらくは悪意のあるデジモンの出現が感知されている。しかも同時に複数箇所。

「こちらの力を分散させようってことだ。結構本気だな」

太一の言葉を聞き終わる前にメノアが立ち上がり、研究室へ向かった。

「システム立ち上げて準備しておくわ」

「おれもあっちに行かなくちゃだ」

「ぼくも行きます」

賢も立ち上がった。

「じゃあ大輔の方へ行ってくれ。ここは」

「多分私たちだけで大丈夫です」

光子郎のタブレットのデータを一目見て勢力状況を判断した京が、D3をモニタに向けながら言った。応接室の隅にあるその液晶画面にもやもやとした光が出現。強く発光してゲートが開いた。

道の駅の駐車場外側に森が見える。うす暗くなってきた奥に何かあるかわからないそこに、何かがうごめいていた。音で近づいてくるのがわかる。普通の人間の大きさではなさそうだ。

城戸シュウが運転席からノートパソコンを差し出した。

「起動したよ」

「ありがとうございます！」

タケルがそのモニタにD3をかざした。

「デジタルゲートオープン！」

モニタにもやもやとした光が現れる。そのパソコンをタケルが受け取り、駐車場の開けた空間へ向けた。光が外へ大きく広がる。森から黒いデジモンが飛び出してきたのとほぼ同時だった。光の中から現れたガルモンがその黒いデジモンを一撃で跳ねのけた。光から続いて出てきたのはヤマトだ。

「間に合ったな」

「ぎりぎりだけどね」

タケルが答えてる間に光から伊織、アルマジモンが出てきた。

「ここは僕たちで止めます」

「早く出発するだぎゃ」

「頼んだよ！」

「スマホはちゃんと充電しておけよ」

「わかってるって」

ヤマトに答えつつドアを閉めるタケルを乗せた車は東京方面へ走り出した。ガ  
ルルモンが弾き飛ばしたデジモンの奥の森から、さらに数体の大きな黒いデジモ  
ンが現れて道路に乗ろうとしている。

「遠慮はいらないぞ、伊織」

「わかってます」

伊織はD3をかざし、アルマジモンが進化の光を発した。

夕陽が射す岸壁を背に、白衣がひるがえった。丈が慣れた様子で腕を通す。

「まだそれ着るには早いんじゃない？」

丈の足元はふわふわに見える長い白い毛におおわれたイッカクモンだ。すでに海上で、療養所へ向かっていた。

「いや、気分だよ気分！」

丈の左手はイッカクモンの角を掴んでいる。その白衣は防刃撥水性能も備えている特注品だ。その分重いが、海風もしのげる。いつ何が起きてもいいようにと普段から用意していた。白衣とゴマモンを入れてあった鞆は肩紐をイッカクモンの角に引っ掛けてあった。

「急がなきゃ！」

「しっかりつかまっててよ！」

イッカクモンは速度を上げる。左右に飛沫が大きく上がった。

デジタルワールド、保護区《九龍城寨》のすぐ近くに目立たない入り口があり、地下五階の堅牢な施設がある。普段の生活するには向かないが、シェルターとしては使える。この施設があることも保護区として選定した一因だった。

その地下二階の頑丈な扉をヒカリが閉めかけていた。

「中はお願いなね」

扉の向こうには子どもたちの世話をしている望月芽心がいた。

「ええ、ここは大丈夫です。お気をつけて」

「ありがとう」

ヒカリは扉を閉めた。重いハンドルを下ろす。

「これでよし、と」

安心した途端、頭の中に激痛が走った。

地上への入り口の狭い隙間から、黒い瘴気のような闇が流れ込んできた。悪意そのもののようなものだ。通常の人間に見えるわけではない。触れるほどの距離にいても何も感じない人も多いだろう。だがヒカリの精神に効果をもたらすには十分だった。うずくまりかけた。

下の階から白い猫のようなデジモンが飛ぶような速さで登ってきた。ヒカリの異常を感知したテイルモンだ。聖なる力を込めたパンチの一撃で闇を散らす。

「ヒカリ！」

「大丈夫。ちよつと油断した」

とりあえず地上に出て日差しのもとで呼吸を整える。

武之内空と、ピンク色の鳥型のパートナーデジモン、ピヨモンが来た。

「思ったより相手の数が多いみたいです。それだけじゃなくて」

ただのデジモンの気配ではないものが瘴気の奥から感じられた。

「光子郎くんの予想通りね。いつかはくると思ってたけど」

《九龍城寨》からニャロモンを抱いた川田範子が走ってきた。

「空さん、終わりました」

二〇〇三年最初にPHになった、暗黒の種子を植えられていた子どもたちの一人だ。今はこの保護区に交代制で子どもたちの世話をしている。彼女は建物内あちこちの緊急時のシャッターを下ろしたかどうか確認していた。

「ありがとう。あなたはここに入ってきて」

「それと、南から黒いものが近づいてるそうです」

「わたしが様子みてくる。ヒカリさんは」

「研究所に戻って、兄たちと交代です」

範子が地下への入り口を閉めるのを見ながら二人は走り始めた。

「じゃあ、がんばって！」

「そちらも気をつけて！」

ヒカリとテイルモンが《九龍城寨》へ向かい、空はピヨモンが進化した巨大な炎の鳥、バードラモンの足にリフトのように腰掛けた。真つ赤な翼が羽ばたき上昇していった。

「太一さん、これを」

「こないだ言ってたやつか」

「ちょうど間に合いました」

「タケルたちも間に合うといいけどなあ。とにかく行ってくる」

光子郎からゴージャルを受け取った太一は、研究所内のゲートからデジタルワールドへ向かった。

「ちゃんと気をつけておきます」

タケルは城戸シユウの車内のチャージャーでスマホの充電している。

「まあパソコンの方がいきなりガルルモンが飛び出すのによさそうだったよね」

タケルが助手席に座ってるのでやや手持ち無沙汰になったルイは自分のデジ

ヴァイスを見ていた。見た目は太一たちのものより旧式に見える。タケルのもつD3のような外見ではなく、ゲートを開く機能もない。そもそも本当に機能するのか。光子郎の研究施設でもそれが本当にデジヴァイスか、外観を似せた別のものなのかはすぐには判断がつかなかった。

デジヴァイスの機能の一つに、それを持ってない人間はデジタルワールドに長くとどまることができないということは次第にはつきりしてきた。軍や犯罪組織などの人間がたまたまPHの通ったゲートを通じて無理にデジタルゲートに侵入した例があったせいだ。

デジモンを上手く利用しようとして入った彼らはしばらくすると調子を崩していった。それだけでなく凶悪なデジモンに襲われた際、通常の銃火器では役に立たない。デジタルワールドで生活するのにパートナーデジモンは必須だ。そしてデジヴァイスも。運良く人間世界に帰れたものがその失敗を報告した。またある人間が受け取ったデジヴァイスは他の人間が持つても機能することはほとんどないこともわかってきた。貸し借りや強奪も無効ということだ。

ルイのデジヴァイスがデジタルワールドで機能する確証がない以上、移動にデジタルゲートは使えない。人間世界の通常の手段を取るしかなかった。

車は東京へ近づいていた。対向車線をバイクが通り過ぎる。そのあとに来た二台の車がUターンして、シュウの車を前後から挟んだ。

療養所への坂道を白い巨体が爆走している。イッカクモンだ。長い階段で揺れが激しい。丈は振り落とされないうイッカクモンのツノにしつかりとしがみついていた。少し見えてきた療養所を囲む林の向こうに黒い影が揺れる。大きめのデジモンたちのようだ。丈が飛び降り、イッカクモンも進化を解除、ゴマモンに戻って療養所の玄関に飛び込んだ。

診察室前を抜けて病室の廊下。その先は食堂と面会室を兼ねたりリビングルームで、奥は一面ガラスのアルミサッシ。外の芝生の向こうはすべて林。そこから黒いデジモンたちが今にも襲ってこようとしている。廊下で病室の開けた扉から恐る恐る奥を見ているのは姫川マキだ。その先に丈の兄、シンの後ろ姿。丈が声をかけながら横を駆け抜ける。

「シン兄さん、大丈夫」

ここはぼくたちが、という前に驚いて立ち止まった。林にいるデジモンたちはとつくにこの室内まで入ってきたはずだった。それを押し留めているものがないければ。

「アルケニモン」

人より巨大な蜘蛛のようなデジモンが部屋の真ん中で外に向いている。それが人型の上半身を持ち上げた。丈の声を聞いて、そのデジモンの手前の看護師が振り向いた。

「私のコドちゃんが、いきなりこうなっちゃったんです！」

本宮ジュンのパートナーデジモンが、コドクグモンであることは丈も知っていた。それが進化した姿がこのアルケニモンなのか。それなら害はないはず。襲ってくるデジモンからジュンを守るために進化したのだから。

林のデジモンたちがこちらへ動き始めた。アルケニモンが構える。ゴマモンも進化させるべきだが、すでに部屋はアルケニモン一体でいっぱい、イツカクモンが出現する余地はない。

「丈、そつちを」

言いながらシンがガラス戸の右端へ走った。丈は左端へ走り、二人で同時にガラス戸を開け放った。アルケニモンが外へ飛び出し、その後を追うようにゴマモンが進化する光が迸った。

## NGO団体DMH

代表理事 高石奈津子

主な業務は人間世界とデジタルワールドの関係を良好に進めること。パートナーデジモンを持つ人間、PH（パートナーヒューマン）の安全を守ること、など。八神太一はこの団体の職員となっている。ヤマトと伊織はこの事務所からゲートを通して一度デジタルワールドへ向かい、再度シュウのパソコンにゲートを開いて出撃していった。その操作を手伝った川田範子の他にもボランティアの大学生たちが多く出入りしており、保護区での活動を交代でしている。

彼女と同じように二〇〇〇三年初めにPHとなった吉沢孝、芝田浩はそれぞれのパートナーデジモンを伴ってシュウの車を挟む二台の車を運転していた。光子郎の研究所に着くまでの護衛だ。戦いの経験は少ないが、これくらいなら役に立てるはず、と志望してきた。

もう一人、バイクに乗っていたのも同じグループの倉田けい子で、ヤマトたちのいる道の駅の外に着いた。黒いデジモンたちとの戦いが終わったところだ。

「おまたせしました」

ゲートを使った移動は便利な面が多いが、デメリットもある。行った先から戻る際、その場にちようにいいパソコンなどがないとすぐにはゲートが開けない。自分が持っているスマホをゲート用に使うとそれをその場に残すことになってしまふ、など。彼女はゲート用のスマホを持ってきたのだった。

「デジタルゲートオープン」

伊織がD3を向けるとスマホ画面にゲートが開いた。

「デジタルワールドで太一さんたちと合流してください」

「丈の方はいいのか？」

「今のところ、あちらは手が足りてるみたいです」

「そうなんだ。じゃ」

ヤマトたちがゲートへ入るのを見届けて、倉田のバイクは東京へ走り出した。

「京さんたち、集まらはりましたで」

泉研究所の研究室、光子郎のいる部屋に人の頭より大きなてんとう虫型のデジモン、テントモンが飛んできた。

「屋上に案内しておきました。わてらの出番はまだでつか」

「タケルくんたちが着いてからですよ。それに、段階がまだです。もう少し休んでください」

「後からたっぷり働かされる、ちゅうことでんな。楽しみしてますわ」

システムモニタに向いていたメノアがそちらを見て、ちよつとだけ羨ましそうに微笑んだが光子郎たちは気づかなかつた。

地平線の奥に黒い竜巻が立ち上り、うねりながら横倒しになった。こちらに向かってきている。巨大な蛇かムカデのようにも見える。近づくにつれその竜巻を構成している粒のようなのが、小ささまざまな歯車であることもわかってくる。その直撃を喰らうだけでも大変なダメージとなるだろう。それだけでなく、最も小さな一つでもデジモンの体に入り込むと意志を奪われ、邪悪の走狗と化する。

「また古い手を使ってきたわね」

飛翔するバードラモンの足に乗った武之内空は、以前ピヨモンが言っていたことを思い出していた。

「ずっと思ってたの。『メテオウイング』っていいながら、飛んでいくのは翼じゃなくてメテオの方でしょ。たまにはウイングが主体になってもいいんじゃないかしら」

デジタルワールドの高原に唐突に突き出た岩場。手前からバードラモンが上昇し、その足元から武之内空が飛び降りる。着地しながら叫んだ。

「やって！ あれを」

歯車の竜巻に正面から近づくバードラモンの全身が赤熱化していた。空が近くにいるときには制御していた力を解き放ったのだ。炎の羽を手裏剣のように放つのがメテオウイングだが、今は飛ばさない。目を前に向けたまま全身を大きく捻った。大きな赤いドリルのように竜巻に突っ込む。歯車はその回転に蹴散らされ、高熱で変質し、砕け散る。巨大なムカデのような竜巻が粉碎され尽くすまで二十秒もかからなかった。

「誰がここにアラモって名前つけたんだっけ」

「ミミたちのいる石造りの巨大な館。同じく石造りの外壁の六つの角に塔があり、その一つに立つマイケルが見渡しながら言った。別の塔にいるステイブの声が通信機から聞こえてきた。」

「君んちのパパじゃなかったか、昔そんな映画撮ったとかで」

「あれえ、そうだったか。なんか別のにさせるべきだったなあ」

マイケルの父は映画スターだ。この保護区に移転する前は彼が所有している広大な敷地の牧場の一部が救出した子どもたちの避難所だった。彼自身はデジタルワールドに来たことはないが、移転先の画像を見た時に自分が出演した映画のアラモ砦に似てるな、と言ったのだった。

「まあ一部だけ見れば砦っぽくもあるけどさ。どっちかといえれば城なんだから。」

第一、イメージ悪くない？」

「まあ気にすんなよ」

「僕たちが全滅するわけないだろ」

通信機からサム、ルーの声が聞こえてきた。彼らは皆ミミたちとほぼ同世代のアメリカのパートナーヒューマンだ。

「無駄口叩いてないで」

「そろそろ次が来るわよ」

同じ仲間のマリア、テータムの声も飛んできた。

外壁の外では先に襲来した黒い歯車の群れをミミのパートナーデジモン、パルモンが進化した大きなサボテンのようなトゲモン一体で撃破した。その後、地面のあちらこちらから黒いケーブルが湧き出し、四方からアラモに向かってきた。そのケーブルもデジモンの体に接触すると意志を剥奪する。それが何百本も襲ってきたのだが、マイケルたちのパートナーデジモンがその全てを破壊し終わるところだった。

「よし、全員一時撤収！ Aチームと交代だ」

外壁の正門が開き、デジモンたちが引き返すのと入れ替わりに三十人ほどのパートナーヒューマンがそれぞれのデジモンと共に外に出た。ケープルの残骸はすでにチリとなり消え去っている。荒野の前にある岩場の上に大輔、賢、そしてブイモンとワームモンが立つ。

「みんなのデジモンの力を借りる時が来たぜ！」

「大丈夫だ、ちゃんと無事に返す。約束する！」

荒野の向こうから黒いトゲのようなものが生えてきた。巨木ほどの大きさがあ  
る先細りの細長い四角柱。頂点だけが鋭く尖っている。進化を阻害する力を持つ  
黒いオベリスク、ダークタワーだ。周囲のデジモンは成長期以上に進化すること  
ができなくなる。その黒い柱の群れが奥から順に伸びてきて、砦に迫ってきた。

東京湾にもダークタワーが何本も立っている。前後を二台の車に守られた城戸シュウの車が芝浦の泉研究所前に急停車した。玄関からパタモンが飛び出してきた。

「タケル~~~~！」

「パタモン！ 待たせたね」

玄関の中には光子郎とテントモンが待っていた。

「早く、ゲートへ。君は」

光子郎はルイを応接室まで案内した。

「少し待っていてください」

その間に研究室のパソコンモニタに京が開いたゲートからタケルとパタモン、城戸シュウがデジタルワールドへ向かった。

二〇〇二年、小学五年生になったタケルがお台場に引っ越した頃。日本ではまだ公衆無線LANが一般的ではなかった。

町なかに無線通信網を張りめぐらせる実験地域としてお台場を中心とした一帯が選ばれ、通話機能がなく、主に電子メール用として使える当時の携帯電話よりやや大きめの端末が小学生とその家族などに配布された。

それは「データーミナル」と呼ばれた。

本来それほど高性能なものでもなかったが、通常の携帯電話よりはメモリーが大型だったため記憶媒体としてかなり使えた。

本宮大輔たちがパートナーデジモンと出会った時、彼らのデジヴァイス、D3がそのデーターミナルと接続し、紋章の力を宿したデジメンタルのデータを保管することができた。この端末のおかげでデジメンタルのデータを複数持つこともでき、その力を使ったアーマー進化も可能となっていた。

その代わりアーマー進化にはデジヴァイスとディーターミナル二つが揃わなければならぬというデメリットもあったのだが、デジヴァイスと違い人間の作った工業製品だったディーターミナルの機能はその後のスマートフォンで十分代用できるものだった。大輔たちも今はスマートフォンをディーターミナルの代わりに行っている。スマートフォンの普及とともに、増大するパートナーヒューマンの中にアーマー進化可能なデジモンをパートナーに持つ子供たちも出てきた。保護区にいる彼らは、アーマー進化チーム、略してAチームと呼ばれた。

大輔が大きく叫んだ。

「よっしゃあ！ Aチーム、出動だー！」

アラモ砦前にいたPHたちのデジモンが一斉にアーマー進化した。アーマー進化はダークタワーの影響を受けない。大輔のパートナーデジモン、ブイモンも青い四足獣型のデジモン、ライドラモンとなった。元々は小学生の大輔一人を乗せるのがやっとくらいの大きさだったものが、いまはその二倍はありそうだ。

「行くぜー！ー！」

大輔を乗せてライドラモンが走る。陸上を走るタイプのアーマー型デジモン群がその後につづく。地響きを立てて林立するダークタワーへ突進していった。

「ぼくたちも行くぞ！」

岩の上に立つ一乗寺賢の後ろから飛翔タイプのアーマー型デジモン群が飛び立った。先頭はプッチーモン。ワームモンが進化した、白い体に赤い大きな耳のようなものがついた被り物をした妖精型のデジモンだ。戦闘能力は低い、ダークタワーの群れの中に取り残され、あるいは撃破し損ねた黒い歯車に取り憑かれたデジモンを発見し、すばやく歯車を取り外す。あとから来たアーマー型デジモンたちがダークタワーを容赦なく粉碎していった。

「今です、みなさん」

伊織の乗る小型潜水艇のようなサブマリモン。アルマジモンのアーマー体デジモンの後ろをついてきた水中型アーマー体デジモンたちが加速した。

九龍城寨保護区の北側、高台にある湖は海かと思うほど広い。その湖面、中央から南側にかけて不揃いな間隔でダークタワーの先端が突き出ている。それが岸に近い方から傾き、沈み行き始めた。伊織のデジモンたちが攻撃を開始したのだ。

もうすっかり暗くなった東京湾に突き出たダークタワーは空中からの攻撃で寸断されていった。芝浦を中心とした地上にも数十本のダークタワーが出ていたが、同様の攻撃で数分とかわからずに破壊されていく。攻撃の主は翼を持つスフィンクスのようなネフェルティモンと、鋼の翼を四足獣の頭部につけたようなデジモン、ホークモンが進化したホルスモンだ。ホルスモンは四体。テイルモンが進化したネフェルティモンにはヒカリが、ホルスモンたちには京とその兄、二人の姉が乗っていた。

「終わったら一旦撤収しまーす！」

京の声で一同は泉研究所屋上へ引き返していった。

九龍城寨保護区の北の湖のダークタワーが全て根本から碎かれ水没し、岸にサブマリモンが上がってきた。他の水中型アーマー体デジモンたちは水路で保護区へ向かう。その方向の上空から翼のある馬のようなペガスモンが舞い降りてくる。パタモンが進化したアーマー体デジモンで、それにはタケルが乗っていた。「砦に近いのは全部処理したよ。残りは大輔たちに任せて僕たちは次に行こう」

「みんな、あんがとなー！ 九龍城寨に移動してもうひと頑張りだ！」

アラモ砦前で大輔がアーマー体デジモンたちに声をかけた。

「ここはもうマイケルたちのデジモンが進化できる」

賢とワームモンもいる。

「あちらのダークタワーを始末したらすぐに戻ってくる」

頭上の塔からマイケルが声をかけた。

「ミミさんはもう出ていったそうですよ」

砦の南方の密林。パルモンとミミが風のように早く移動している。

パルモンの指先の触手はかなり長く伸びる。木の枝を掴むと同時に縮めると、前に進む。同時に逆の触手を伸ばす。その繰り返しがかんりの速さになる。

草や木の根で平坦なところなどない密林で、地表を歩いてはこれほどの速度は出せないだろう。空中を飛ぶよりも早いかもしれない。

ミミはパルモンにぶら下がっていた。その速さでありながらミミは地上のデジモンを見逃さなかった。中には黒い歯車に取り憑かれたデジモンが残っているかもしれない。实际いたのだが、それはもう密林を出るあたりだった。

パルモンはすぐさまトゲモンに進化し、体表の針を飛ばしてそのデジモンについている歯車を破壊した。

「兄弟のパートナーデジモンが同じか違うかは、面白い問題だね」

療養所のラウンジで見回しながら言う城戸シンの前にはゴマモンが三体、仲良さそうにしている。開いたままの大きなガラス戸の外の暗闇から、断続的に光と何か壊れる音が響いてくるのを聞きながらシユウが答えた。

「その辺の問題も泉研究所で扱おうとしてるみたいだよ。でもなかなかそっち方面には手が回らないみたいで」

「あそこはもつと電子系な研究がメインだもんねえ」  
丈も続けた。

城戸三兄弟のパートナーデジモンはどれもポケモンから始まり、ゴマモンに進化している。先にパートナーを得た丈の影響なのかと思われたがその先の進化は違った。いまコドクグモンを抱いてる本宮ジュンの弟の大輔はブイモン、と違うデジモンがパートナーだ。

ガラス戸の外から羽音と、土を掘る音が近づいてきた。タケルを乗せたペガモンが着地する。

「だいたい片付きましたよ」

兄弟で違うデジモンといえば、八神太一、ヒカリの兄妹、ヤマトとタケルの兄弟も違う。

外で待っていた伊織の前の地面が盛り上がり、ドリルのような口を持つ硬質なデジモン、デイグモンが現れた。すぐに進化を解いて、アルマジモンに戻る。

「この辺は数が多くなかったぎゃあ」

療養所付近にもダークタワーが生えてきてたのだが、二体のデジモンで素早く処理してしまったのだ。

三体のゴマモンが前に出て代わる代わる喋る。

「よおし、じゃあ、おいらたちの出番だな」

「二人は休んでてよ」

「冷たいお茶もあるよ」

他人から見ると区別がつかないのだが、城戸兄弟が自分のパートナーデジモンを見間違えることはないという。

「ま、伊織は休んで」

タケルが伊織に言った。

「僕たちは研究所に戻らなきゃ」

ペガスモンも進化を解いてパタモンに戻り、タケルの頭に乗っている。

「大丈夫ですか、その」

伊織が口ごもる。タケルと伊織、二人が一緒になければジョグレス進化ができないのだがそれでもいいのか、心配してるのだ。他のジョグレス進化の組み合わせ、大輔と賢、ヒカリと京は同じ場所にいる。

「行くのは僕たちだけじゃないから」

タケルがにっこりと答えた。

後にルイが誰にとはなくこう聞いたことがある。

「タケルさん。どうしていつもあんなに穏やかなんでしょう」

「たまたまその時いたのが伊織と賢、京だった。」

「さあねー、でも子供の頃には結構ブチ切れたこともあったって聞いたわよ。」

「ね、伊織くん、一乗寺クン」

「あ、あのそれは」

「ええと、その」

「怒ると怖いんだって？」

伊織はかすかに胸騒ぎを覚えた。それがタケル本人に対する不安からではなく、彼が向かう先の相手への憐憫だと気がついたのはもっと後のことだった。

九龍城寨保護区あたりも薄暗くなってきた。

砦の西に向いた屋根の上に太一、アグモンとヤマト、ガブモンがいて外を見下ろしていた。いや、太一は仰向けに寝転がっている。

「そろそろだぞ」

周囲のダークタワーが一掃されていくのを見ていたヤマトが言った。聞いた太一がぐい、っと起き上がる。

「やっと出番ってわけだ」

夕陽の底から黒い塊が湧き上がり、こちらに向かってきた。

アラモ砦保護区はまだ真昼だ。密林の先、岩山を越えると広大な平野が広がり、その先の彼方に巨木が立っていた。直径だけでも数キロメートルはある。そびえ立つ半ばに雲が何層にもあり、頂点は霞んで見えない。

その巨木が、ゆっくりと傾きつつある。

手前の岩山に登ったミミが指差した。

「あれよ、トゲモン！」

下のデジモンたちに取り憑いた黒い歯車を除去し終わったトゲモンがミミに並んだ。

二人の奥で斜めになっていく巨木。その根本に黒い雲が湧き上がっている。いや、雲ではない。黒い輪郭が広がりながら崩れていく。細かい粒の集合体だったとわかる。今度は黒い歯車ではなかった。デジモンだ。それぞれが成熟期、完全体などの黒いデジモンたちだ。

それが数百万もの群れとなつて雲のように見えていた。地面から湧き上がりこちらに近づいてきている。いやその地面にも黒いものが広がる。飛べないタイプの黒いデジモンたちだ。

「さすがにわたし一人で相手にするにはちよつと多いわね」

「まあね。そんな無駄なことするために来たんじゃないし」

それより、と背後の密林に振り返った。

「この森のデジモンたちに、早く逃げるように言って」

「わかった！」

トゲモンは森へ駆け込んだ。

大輔が周囲を確認してから叫んだ。

「全部終わったな！ 撤収だ！」

九龍城寨周囲に林立していたダークタワーは全て粉碎していた。砦一階の通信室の窓から外に持ち出したモニタを武之内空が支えている。賢がそこにゲートを開き、プッチーモンを先頭にした飛翔型アーマー体デジモンたちが飛び込んでいく。大輔の乗るライドラモンを先頭にした地上型のアーマー体たちが続いた。最後に残った賢がゲートに入る前に夕陽の方に向いた。

「なんとか間に合いましたね」

夕陽はすでに黒いデジモンの群れに覆われて見えなくなっている。地平線いっぱいには広がるデジモンがぐんぐんと近づいてきていた。

「おつかれさまでした。デジモンたちも無傷で返せるわね」

空が微笑んだ。

「でも、きつきのデジモンたちとそのパートナーたちは喜んでましたよ。戦うことじゃなくてもみんなの役に立てるって」

「そうね。彼らが戦うようなことにならないままにしないとね」

賢がゲートに消えた。砦の屋上には太一、ヤマトだけでなく香港の三兄弟、中国の月紅（ユエホン）、ベトナムのディエン、インドのミーナほか、戦闘経験のあるPHたちとそのパートナーデジモンが夕陽の方向に向かって立っていた。

デジタルゲートを使った移動は距離を短縮できる。デメリットもある。現実世界内、デジタルワールド内をそれぞれ直接結ぶことはできず一度は別の世界を経由しなければならぬ。九龍城寨保護区からアラモ砦へは泉研究所のゲートを経由していた。屋上に二台のモニタを距離を離して向かい合わせに設置。どちらもゲートを開いたままにしてあるその間を大輔とデジモンたちが通り過ぎていき、最後に賢。京とハイタッチしてアラモへのゲートに入って行った。

「移動終わりました。ゲート閉じます」

一階メイン研究室の中央モニタ前のコンソールにメノア、隣のモニタ前には光子郎がいる。

「これからが本番ね」

「メノアさんのおかげですよ。僕だけではこんな装置」

「もつと大掛かりなはずだったけど、記憶が曖昧なところがあつて。本番までに直すつもりだったのに、バグも残ったままだし」

「そうだ、それルイくんに説明しとかないと」

光子郎の後ろにいるタケルが答えた。

「それはぼくがやるときですよ」

「お願いします」

光子郎はモニタのゲンナイにも話しかけた。

「では、そちらもよろしくおねがいます」

ノートパソコンを小脇に立ち上がる。研究室前でタケル、パタモンと光子郎、テントモンは左右に分かれた。

「じゃ、気をつけて」

タケルは応接室へ

「そつちこそ！」

光子郎は地下へ向かった。

地平線から迫る、雲のようにも見えるほどの黒い大群。画面をズームする。雲を構成する粒の一つ一つがデジモンの形をしている。

「間違いないな。ダークタワーデジモンだ」

太一の装着しているゴーグルは光子郎の手でいくつかの電子的機能が付けられていて、構造組織の分析もある程度できた。

「じゃあますます遠慮することはないな」

ヤマトは手袋の緩みを直す。

「そんなのしたことないくせに」

二人はデジヴァイスを握りしめた。

「別に懐かしくはないよなあ」

アラモ砦外壁上に大輔、賢、ミミとウオレスとそのパートナーデジモンたちがいる。南から黒いデジモンたちの大群が近づいてきて、密林はもう半分も見えなくなっている。

ダークタワーデジモンとは元々はその名の通りダークタワーから作られた、デジモンの形をした何か別のものだ。通常のデジモンらしい心はない以外はほぼ同じ機能を持つ。大輔たちはその黒いデジモンともかなり戦った。十年以上前のことになる。

「ただのダークタワーデジモンじゃない。かなりやばいのが混じってる」

光子郎経由で情報を聞いていた賢が眉を顰めた。

「ああ、見えてきた。あいつらめんどくさいよなあ」

黒い雲のようなデジモンの群れを率いてるのはスカルサタモン、翼のある骸骨のようなデジモンだ。元のそのデジモンには苦い目に遭わされたことがある。

「まあ、おれたちは負けねえけど」

「もちろんだ」

ブイモンとワームモンが進化の光を発しはじめた。

「ええー、ぼくだけかあ知らなかったの」

療養所で城戸シユウが兄のシンと弟の丈を交互に見ていた。

「ぼくがここに赴任する時に言わなかったっけ？」

「あの頃は京都で忙しかったから、あまりこつち帰ってきてなかったんだっけ、それにしても青森もずいぶん急だなあとは思ってたんだけどさあ」

意識不明で発見された西島大吾から、デジモンと共通する微弱な電磁波が時々発せられており、姫川マキが近くにいるとそれが強くなることを光子郎が発見。同じ周波数は望月芽心、少し違うものがウォレスやメノアからも検出されていた。最初の内は、今この世界の太一たちと違う記憶を持つものを送り込んで心理的な混乱や不安を内部から起こそうという、何者かの悪意によるものではないかという推論もあった。しかし彼ら自体に悪意があるわけではなく、西島、姫川以外はむしろ協力的だったため、別の仮説が立てられた。

太一たちを敵と狙う何者かが攻撃する際のマーカーとして利用されてるのではないか。もしそうだとすると、都心の病院は危険だった。攻撃された際、周囲への被害が大きすぎる。とりあえず、もし襲撃されてもいいように周辺に民家がない病院へ移送し、その監視役兼緊急時の守護もできる、パートナーデジモンをを持った医師として城戸シンが任命された。裏側の手配はNGO団体「DMH」の高石奈津子がやったようだ。他のマーカーかもしれない芽心、ウォレスは防衛しやすいデジタルワールドの保護区にいる。メノアのいる研究所は彼女自身の研究を応用した独自のシステムがあった。本格的な実用まであと半歩というところは大和田ルイが訪れ、例の周波数に異常が検出された。ルイとメノアが近づいたことが原因かもしれない。システムの稼働もすぐにはできないが、何より太一がジュネーブに行っている。時間稼ぎをする必要があった。それでタケルがルイに同行して東北までいくことにしたのだった。

「何かが襲ってくるなんて杞憂に終わればいいなあと思ってたんだけどね」  
シンの口調は落ち着いてるが、目は鋭く外を見据えていた。

「結果は見ての通りだ」

ラウンジの大きく開いたガラス戸から見える暗い森。何か大きなものが蠢いている。ダークタワーデジモンだ。

「結構数が来てるな」

マーカーと目される人物を分散させることで危機も分散する計画だった。もしどこか一箇所が襲撃されても太一たちが揃っていれば何とか対処できるはずだ。しかし実際には四箇所同時に襲撃という事態になった。しかもそれぞれの場所に敵の数が多い。

「デジタルワールドに比べると相手はかなり少ないとこだけが救いかな」

「こっちの世界に出現させるのって、結構手間なんだろうね」  
丈も油断はしていない。

森の黒い影が動いた。丈たちがデジヴァイスを構える。森の手前の地面にいる三体のゴマモンが進化の光を発し始めた。左右にいる伊織のアルマジモン、本宮ジュンのコドクグモンも。

泉研究所は元々が倉庫だ。一階は応接室、研究室などに分けられているが仕切りを取り払った地下はかなり広く、余分な照明はつけてないので暗い。その中央に小さな一軒家ほどの大きさの装置があり、周辺にケーブルが這っている。壁を背にスタンド型のパソコンテーブル。光子郎がコマンドを打ち終わり顔を上げた。装置と光子郎の間にはテントモンがすでに進化して待機している。五メートルほどの高さの直立したカブトムシのようなデジモン、カブテリモンだ。

「いきますよ、カブテリモン」

「まかしとくんはなはれ！」

カブテリモンが力を込めると腹部の前方に渦巻く電流の塊が出現した。四本の腕を大きく広げて装置めがけて放つ。装置の前面の受容パネルがその電撃を受け止めた。装置全体に電流が行き渡り起動する。

装置中央部から不可思議な光が広がった。

本来は通常の電力で稼働するように進めていたのだが、まだ現状では起動時のみ莫大な電力がかかってしまう。それを解決するためカブテリモンの電撃を交換するパネルを設置したのだった。もちろんカブテリモンは装置を破壊しないように電撃を調整している。

研究所の屋上で待機していたヒカリと京、その兄妹たちがネフェルティモン、ホルスモンに乗って飛び立った。デジモンたちの胴にはベルトが巻かれ、ケーブルがつながっている。

「展開開始！」

京の声で五体は大きく広がった。屋上から繋がるケーブルに光が伝わり、五体へのケーブルの結節点を中心に不可思議な光が広がっていく。地下の装置からの光だ。デジタルの網のような光の幕が地上まで伸びて研究所の周囲を覆い、すばまって建物全体と重なって光が消えると、その数分前と何も変わらないように見えた。違うのはその範囲内にいた黒いデジモンたちが見えなくなったことだ。

「疑似デジタルワールド、展開完了」

光子郎はモニタから顔を上げてカブテリモンにも声を掛けた。

「おつかれさまでした」

「いやいや、それほどのこととはしてません」

パソコンからメノアの声が流れてくる。

「やったわねイジー」

「ぶつつけですが、上手くいきましたね」

メノアと光子郎は疑似デジタルフィールド発生装置を開発していた。実行範囲内にいるデジモンとデジヴァイスを持つ人間だけを現実空間のサブ空間のようなものに移送できる。メノアの記憶にある電脳空間を作る技術の応用で、これによりデジモン同士が戦っても現実の建物や人々に被害を及ぼさなくて済む。しかしまだ開発途中で実行範囲と時間の制限があり、メノアがバグのようなものと呼ぶ現象も起きていた。

「あとは作戦終了まで持つてくれれば」

大和田ルイは呆然と立ち尽くしていた。研究所の応接室にいるはずだ。それがまるで別の空間に放り出されたように、全体が見慣れない光りに包まれ、さつきまですわっていた椅子がどこにあるのかすら分かりにくくなっている。よく見れば椅子やテーブルはそこにある。応接室に未だいることは間違いないらしい。その奥にあるモニタも見える。だがそこに映されていた光景が、モニタの枠を超えて手前の空間に大きく浮かんでいた。見回すと周辺の壁の手前にも別の光景がある。しかも奥行きのある立体映像だ。映されているのはデジタルワールドの二つの保護区周辺、丈たちのいる療養所周辺、そして今この研究所周辺の風景だ。ただし研究所周りだけは通常の夜景ではなく建物の輪郭が妙な色の光を放っている。現実世界の光景ではなく擬似デジタルワールド内のものだ。フィールドが発生した途端、室内の様子が変化したのだった。メノアの言う「バグのようなもの」がこの作用だった。

元はモニタに分割画面として表示されていた各地の現状が、何枚もの大きな立体映像となったことで部屋の元の大きさを分かりにくくなっている。ここに来る途中の廊下が足元に光源を設置してあるのが珍しいと思ったが、こうなった時に道に迷わないためだったのだろうか。そうかすかに思ったが、ルイが唾然としている原因はその現象ではなかった。タケルがこんなことが起きるからと前もって言うてくれていたので、そこはある程度予想通りだ。それよりも映し出されている映像の中身、デジタルワールドの光景が衝撃的だった。

どちらの保護区も広大な平野の中にポツンとある。そこへ黒い絨毯が迫っていた。どうカメラを設置してあるのか、かなり高いところからの俯瞰の画面では小さなお菓子箱に群がりくる蟻の大群のようにも見える。もちろんそれは蟻などではなく全て黒いデジモンだ。どれほどの数になるのか。砦には何人いるのか。そのうち戦えるデジモンは何体くらいいるものなのか。それがいくら強くても、この数に対抗できるものなのか。

デジタルワールドだけではない。海辺から登った林の中の療養所、都会のビルに囲まれたこの研究所の画面もある。暗くて分かりにくいのが、どちらの周囲にいるデジモンもかなりの数ではないのか。

その黒いデジモンたちに変化が起きた。九龍城寨正面の一団が加速、黒い絨毯の一部が槍の穂先のように尖り、砦に迫った。強行突破する陣形だ。

城砦から赤い光が飛ぶ。

黒い絨毯の尖った部分が一瞬で消し飛んだ。

なにがおきた

ルイが目を見張ってる間に砦から青白い人型のものが飛び出した。まだ距離があつたはずなのにあつという間に黒いデジモンの群れに飛び込む。ガブモンの完全体、人狼型のワーガルモンだ。速度を落とさないうま奥へ進む。周辺のデジモンたちが切り飛ばされ次々に消滅していく。

砦から赤い光の二撃目が飛んだ。光ではなく、噴射炎でその先は有機体ミサイル。アグモンの完全体メタルグレイモンの武器だ。黒いデジモンたちの一帯がまた消し飛ぶ。砦から頭部や胴、左腕を金属で覆われたメタルグレイモン本体が出てきた。三本の金属爪がついた左腕先を飛ばす。それだけで数体のデジモンがまた消し飛ぶ。左腕は本体とチェーンで繋がっており、それをぐる、っと大きく振り回し数十体のデジモンが薙ぎ払われた。

別の画面では二本足で直立した青い竜のようなデジモンと、緑の昆虫のような人型のデジモンが黒いデジモンたちを打ち砕き、黒い絨毯の中央に切れ目を作っていた。ブイモンが進化したエクスブイモンと、ワームモンが進化したステイングモンだ。絨毯の切れ目は閉じていき、エクスブイモンとステイングモンを取り囲む形になった。

二体が光を発し、一つになる。光が収まると合体、ジヨグレス進化したパイルドラモンが現れた。左右の腰の生体砲からエネルギー波を連発、ぐるりと一回りするだけで周囲の数百体のデジモンたちが砕かれた。

さらに別の画面。テイルモンと、ホークモンが進化した赤い鳥型のデジモン、アクイラモンがジョグレスしてマスクをした人のようなデジモン、シルフィーモンとなっていた。両腕からエネルギー波を放つ。研究所の屋上に飛び移ろうとしていたデジモンたちが次々に散っていった。

療養所の画面では丈のゴマモンが進化した完全体、亀のような甲羅を背負ったズドモンがハンマーの一振りで何体もの黒いデジモンを打ち砕きつつ進んでいる。その左右でシュウのゴマモンが進化した雪の巨人ユキダルモンと、シンのゴマモンが進化した白い長帽子を被った魔法使用のようなソーサリモンがそれぞれデジモンたちを攻撃する。だが凄まじい破壊力で右側から真っ先に攻め込んでいくのは本宮ジュンのアルケニモンだった。左右の手から伸びる数本のワイヤーが黒いデジモンたちを切り刻む。伊織のアルマジモンの成熟期、アンキロモンは全身を硬い表皮に覆われて守りに強い。丈たちの守護のため後方に位置していた。

立体映像で各所の戦いを見ていたルイは、やっと太一や大輔たちのデジモンの強さがわかった。これだけの戦力を一箇所に集めていれば、特に現実世界の療養所やこの研究所規模の守りならば何も心配することはなかったかもしれない。だが敵の勢力は分散している上にデジタルワールドの二つの砦、アラモと九龍城寨に攻めてくる数があまりに多すぎる。メタルグレイモン、ワーガルルモンやパイルドラモンはあえて敵陣の真ん中に突っ込むことで砦方向への進行を食い止めようという作戦だということも分かった。それでもこの敵の数を全て処分することができるものだろうか。もし出来るとしても何時間かかるのか。そこまでエネルギーは持つのか。現に彼らを取り囲んだ黒いデジモンたちの輪は次第に狭まってきたのではないか。黒い絨毯の左右両翼は砦の方に向かおうとしている。そちらを守るデジモンたちの戦力は十分なのか。九龍城寨とアラモ砦、二つの画面を見比べるうちに、別の動きに気がついた。

アラモ砦のそばを通る線路に何かが走っている。東の方から近づくとそれに画面が自動的にズームした。列車のように見えた。

あれは

(トレイルモン。あれもデジモンだよ)

久しぶりに頭の中に聞こえてきた声に驚いていると、トレイルモンが砦の手前で止まり、六人の子どもが飛び出てきた。南側、黒いデジモンたちの方向に。

あれもパートナーヒューマンなのか。しかし、一緒にいるはずのデジモンたちがいない。と、見る間に六人はバーコードのような光に包まれデジモンに姿を変えた。

(彼らは、人間でデジモンなんだ)

そんなこともあるのか

だがもつと驚くのはその戦闘力だった。六体それぞれがメタルグレイモンやパイルドラモン並、いやそれ以上に強いかもしれない。黒いデジモンの東側はあつという間に駆逐されていく。

(彼らはこことは別の世界から来たんだ。そこは、こう呼ばれてる。

『デジモンフロンティア』

そういうタイトルのテレビアニメ)

アニメの世界？ どういうことなのかルイがわからずにいると

(そしてあちらは)

九龍城寨の画面。西から攻めてくる黒いデジモンたちの、南の一角に次々に爆発が起きた。そちらから別のデジモンの一群が攻めてきていた。その集団の中にいる人間だけでも十人以上、デジモンの数はその数倍はいそうだ。先頭の少年が砦に手を振っている。砦で太一が手を振りかえしている。

（彼は工藤タイキ。去年、助けてもらったお礼をするって、みんな連れてきた。彼の世界は、『デジモンクロスウォーズ』

以前そこが危ないことになって、いろんな世界からデジモンとタイマーが助けに行ったことがあったんだよ）

タイマー？

（ぼくの世界ではデジモンと対になってる人間をタイマーって言うんだ。その世界の名前も『デジモンタイマーズ』）

それもやはりテレビアニメの世界なのか

(他の世界から見ればそうだろうけど、ぼくには本当の世界。ぼくから見るとこの世界もテレビアニメの世界なんだよ。

『デジモンアドベンチャー』って呼ばれてる)

この世界も？

(ぼくは訳があつて、ちよつと未来から来たんだ。今いるのは、いろんな世界の狭間というか。おかげで他のデジモン世界にアクセスして助けを呼んでこれただけだね)

九龍城寨周辺に別の一群が現れた。中心にいるのはゴーグルをした緑の髪の少年と赤いヘルメットを被ったようなデジモンだ。

(かれらは『アプリモンスタース』という世界から。その世界にアグモンが行ったこともあったって。彼らはデジモンとはちよつと違うかもって心配もあったみたいだけど、問題なさそうだね。九龍城寨に縁があったみたいだし)

研究所屋上の画面に別のデジモンたちが映っている。丸い眼鏡の少年を中心に、数人がいてそのパートナーデジモンたちのようだ。彼らも強い。研究所に向かってくるデジモンを防いでる。

(彼らは『ビートブレイク』という世界から来てもらった。かなり未来の世界らしい)

そんなにいろんな世界から。

（最初にこの世界に接触して、君の声が聞こえた時、君にはこの研究所に行くよう勧めたけど、その時はその裏に何か黒い力が関係してるってわからなかったんだ。それでこの世界のデジタルワールドのゲンナイさんという人にも接触してあわてて準備進めてきた）

ゲンナイの名はタケルの話でも聞いた。今でも現役なのか。

（もしたらクロスウォーズの世界を助けに行った時よりも、デジモンに関係した世界は増えてる。そっちも呼ぶといいだろうし、って。別のルートもアドバイスしてもらって、お台場に残るデジモンの思念とも話して。ちよつと変わった世界からもきてもらったよ）

クロスウォーズの軍も強力だ。黒い絨毯の南側は次第に崩されていった。画面が北の方にズームする。

そこに小さな翼のある犬のようなデジモンがいて、見る間に大きな赤い龍のようないなデジモンに進化した。一体で黒いデジモンを次々に倒していく。その傍らに長い帽子を被った魔法使いのようなデジモンがいる。

(彼らの世界にも接触できた。お台場のワイザーモンの思念が他の世界のワイザーモンと連絡できるかもって)

名前は聞いていた。あれがワイザーモンなのか。

(彼ら、ちょっと質感が違うと思わない?)

言われて見ればそんな気もするが、何が原因なのかわからない。

(彼らの世界は、『デジタルモンスター ゼボリユーション』  
人間がいない、デジタルワールドのデジモンだけの世界で、しかも映像として  
はフルCGなんだよ)

フルCGの世界からも。それでは、この世界も他から見るとアニメの世界とい  
うのも本当なのだろうか。

(自分がどの世界にいたのか悩んでたみたいだけど、ちょっと外から見るとそん  
なに差がないんだよ。君は君で今ここにいるんだからね。それが一番大切なこ  
と)

何か少しわかりかけた気がした。

（もつと説明したいけど、あまり時間がない、まだ他の世界からもきてるし、ええと、ただ、ぼくの世界からはあまり呼んでこれなかったんだけど）

「なんだ、俺さまだけじゃ不満ていうのか」

いきなり聞こえた別の声に振り向くと、巨大なバイクに乗ったマスクをした人間型のデジモンがいた。もちろん普通の人間よりははるかに大きい。この部屋にそんなものが入るスペースがある訳がない。よく見ると少し透けてて、立体映像のようだった。

（そういう訳じゃないよ、ベルゼブモン）

「じゃあ、いくぜ！」

ベルゼブモンはバイクごと映像に突っ込み、九龍城寨の前に急降下していった。空中からでも両腕の銃を発射。黒デジモンたちが粉々にされていく。

「やれやれ、相変わらずだねえ」

別の声が聞こえた。やたらと爽やかな青年が、ちよつと怖そうなデジモンと共  
に  
いる。

（あ、リョウさん）

「呼ばれてないのにきちやった。ぼくはちよつと挨拶したいからあっちにい  
く  
よ」

秋山リョウとサイバードラモンはアラモ砦の映像に入っていた。

(じゃあぼくもこれで。また会うことがあったら、今度は声だけじゃなく会ってみたいね)

待ってくれ 君は一体

(ぼくは松田タカト タイマーだ)

静かになった。ルイはそこまできて、タケルがいつの間にか研究所の応接室からいなくなっていたことに気づいた。

九龍城寨の東、これまで黒デジモンたちがきたのとは反対側から突然黒い雲が湧き上がった。飛行型の黒いデジモンの群れだ。アプモンのチームや香港の三兄弟たちは砦の東側に急いだ。黒い雲は地上型デジモンたちとは比べ物にならない速さで近づいてくる。その数も更に数倍。

中空に声が響いた。

「ファイナル・エリシオン！」

北の奥からとてつもない大きさのエネルギー波が空を渡り黒い雲にぶつかる。その一撃で東から来た黒いデジモンたちは半分以下になってしまった。

天空の彼方から赤いマントをはためかせた白い聖騎士型デジモンが、まっすぐ立った姿勢のまま下降してくる。

「このデュークモン、助けを求め声に応じて参上した」

(ありがとう、デュークモン！)

「そなただな、求める声の主は」

(そうだよ。デュークモンの姿を見ることが出来るなんて)

「その声。初めて聞いたはずだが、なにやら懐かしい」

そうしている間にも近づく黒いデジモンの残党は、デュークモンの右腕から伸びる光の槍によって次々と消滅させられていく。

アラモ砦の西側から迫っていた黒いデジモンたちの先鋒が、多数の種類連続攻撃で砕け散った。

「あれは。太一さんたちだ！」

砦外壁の上から見ていた大輔が驚きの声を出した。

「小学生の頃の」

「そうなのか」

その頃の太一を知らない賢も驚きの目で見ている。

「えー、でもあれは私たちとは違うわ」

ミミに言われてよく見ると、グレイモンやガルルモンも少し違う進化をしていた。知らないデジモンたちも多数連れている。『デジモンアドベンチャー』と呼ばれる世界の太一たちなのだが、大輔たちはその名を知らない。

「別の世界の太一さんたちかあ。どこの世界でも太一さんは強ええなあ」

「よく見る大輔、後ろの方から来るのは」

「あー！俺たちだ！小学生の頃の！あその太一さんたちと同じくらいの歳になってる」

「別の世界で別の時間の人たちが一緒に来たってことなのか」

「なんかそれで喜んでた人がいたの思い出したぞ。あんどき、おれもちよつとの間だけ太一さんと同じ年になって戦ったんだ」

賢も思い出してきた。

「そんなことがあったような気もする。でも、それっていつのことだったんだ」

「あまり気にしなくていいんじゃないかな」

振り向くと、さっきまで誰もいなかったところに爽やかな青年と怖そうなデジモンがいた。

「今ある自分を信じることが一番だよ」

「あなたとは、前に会ったことが」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。でも気にしなくていいって。ぼくもよくわかってないからね」

言いながら秋山リョウは彼のデジヴァイス、ディーアークの溝にカードを滑らせた。怖そうなデジモン、サイバードラモンが赤いマフラーをした正義のヒーローのようなデジモン、ジャステイモンに進化する。

「じゃ、また！」

ジャステイモンは黒いデジモンたちに飛び込んでいき、たちまち大きく道を開いていった。

「じゃあ行くよ、パタモン」

「いよいよだね！」

タケルとパタモンは薄暗い霧の中へ歩いていった。

「わてもやりまっせ」

研究所屋上、光子郎の前でカブテリモンが完全体のアトラカブテリモンに進化する。

「頼みましたよ！」

周囲の半デジタル空間のあちこちで攻防が繰り広げられていた。

戦っているのはヒカリや京たちだけではない。

「ここ、すこしミラーワールドに似てる」

「気を抜くんじゃないわよ！！」

「わかってるってな！」

ビートブレイクのチームも戦いは慣れている。

「アマンカワくん！」

明るい髪色の少年が屋上への入り口をあけてきた。

「ダーリン、こつちじゃないさ！」

クラゲのような頭部を持つ小型のデジモンが追ってきた。

「ええ？ アマンカワくんの声がしませんでした？」

小型のデジモンは少年を引っ張り、戻っていった。

「誰だ、今の」

シルフィーモンが見ていたが

「気にしないほうがいいかも」

ヒカリアはあっさりと答えた。

巨大な鳥人が掌に空と、太一、ヤマトを乗せて猛スピードで飛んでいる。ピヨモンが進化した完全体ガルダモンだ。黒いデジモン群の真ん中に切り開かれた広い道をたどり、メタルグレイモン、ワーガルルモンのいる最前線にあつという間に着いて太一、ヤマトを降ろした。

「砦の方は心配ないから！」

「わかってるって」

「行ってくるぞ」

太一、ヤマトはメタルグレイモン、ワーガルルモンに乗って先へ進んでいく。

殲滅を逃れて砦まで近づいた黒デジモンの一頭が賢に迫る。横から飛び出たモノクロモンが体当たりで蹴散らした。

「ぼーっとしてないでよ！ ケンが怪我したらミヤコに怒られちゃうからね！」

モノクロモンのパートナー、チチヨスが檄を飛ばした。

「うん、ありがとう」

「いくぞ、賢」

大輔と賢はテータムのパートナー、エアドラモンにのってパイルドラモンのところまで飛んで行った。

アルケニモンは疲れていた。数時間前まで成長期から先の進化をしたことがなかったのだから無理もない。勢いで一頭だけ敵の真ん中まで進んだため、周囲を取り囲まれてしまった。反応しようにも腕の動きも遅い。黒いデジモンが迫る。そこに閃光と銃撃音が走り、数頭の黒デジモンが吹っ飛んだ。

「その綺麗なおねーさん、気をつけたほうがいいぜ」

全身に包帯を巻き付かせたミイラ男のようなデジモン、マミーモンが巨大な銃オベリスクを振り回している。アルケニモンには分からないことだが、このマミーモンは質感が違う。「ゼボリューション」の世界から来たのだ。

「俺だけはぐれてこっちに来ちまったけど、これでよかったみたいだな」

反対側の上空から同じくオベリスクの発する閃光が降りそそぎ、数頭の黒デジモンが砕け散った後に白衣をまとった大男が着地した。

「おねーさんは下品だな。お嬢さんと言え」

また別の世界からきたマミーモンだ。その胸元の聴診器に丈が気がついた。

「医者のマミーモンだって？」

背後でガラスの割れる音と共に悲鳴が聞こえた。姫川マキの声だ。慌てて療養所内に戻ると、病室の方から金髪の青年が出てきた。

「もう撃退した。ぼくも医者だ。大丈夫」

その奥、病室内には青いケモノ型デジモンの姿が見える。

「敵はこっち側からもきてるけど、ぼくの仲間たちがなんとかするよ」

廊下の奥に数人の人影が見えた。

「あ、ぼくはトーマ。こっちはガオモン、よろしく」

彼らは『デジモンセイバーズ』の世界から来ている。

「彼一人だけで十分足りてそうだけどね」

玄関の外に髪を後ろで縛った青年がアグモンと共に飛び出し、素手で黒いデジモンを殴り飛ばす。それをきっかけに激しい戦闘の音が響いてきた。

「あの人たちも強いよねー」

「ミミが見てるのは「フロンティア」チームだ。」

「あのデジモンと、あっちのデジモン、人間の時は双子の兄弟なんだって」  
「双子」

「ウォレスはその言葉が気になった。テリアモンも見ている。」

「思い出してきた？」

「そうだ、双子だ。ぼくにも双子の兄弟がいたんだ。」

「どうして忘れてたんだろう」

「テリアモンを見る。」

「それできみたちも双子だったんだ」

「やっと思いだしたね。これで進化できるよ」

テリアモンは両手に重火器を装備したガルゴモンに進化し、黒いデジモンたちの攻撃に向かった。

九龍城寨から西の果て。暗い森がどこまでも広がっている。その途中に万里の長城のような城壁が地平線の端から端まで伸びている。メタルグレイモンとワーガールモンが一撃でその壁を打ちやぶり、侵攻した。壁はその奥に何重にも続いている。

パイルドラモンはさらに進化し、巨大な竜型のインペリアルドラモンとなった。大輔、賢だけでなく他の世界からの人やデジモンも載せて黒いデジモンたちが吹き出した地点へ向かう。天をつく巨木が倒れた後に広大な穴が開いていた。最高速度のままその穴に突っ込んで行った。

「あれは、何をやってるんだい」

どこまでも霧に包まれた灰色の世界で明るい髪の少年、東御手洗清司郎（ひがしみたらいきよしろう）はやつとたどり着いた仲間の元で尋ねた。ちよつと小柄な少年天ノ河宙（あまのかわひろ）と彼に肩車してもらってる白い小さな竜型のデジモン、ガンマモン。髪の長い少女月夜野瑠璃（つきよのるり）と、大人より大きくふさふさの毛に覆われた黄色いデジモン、アンゴラモン。彼らは『デジモンゴーストゲーム』の世界から来ていた。

「私たちとここに来てから、ずっと語りかけてるの」  
瑠璃の言葉で目を凝らす。

霧の向こうに清司郎よりちよつと上の青年と、小さな黄色いデジモンがいる。タケルとパタモンだ。

「まさか……あのデジモンに」

タケルの向こうはどうやら海だ。その奥に、霧に隠れてよくは見えないが巨大で禍々しい影がいる。

「あれってダゴモンさ」

清司郎のパートナー、クラゲのようなデジモンで空中に浮いているジェリーモンが言った。

「それは無理ゲーってやつさ」

「そうじゃないんだ」

アンゴラモンが静かに話し始めた。

「語りかけてる相手はデジモンじゃない。海になんだ。この世界はいろんな邪念が集まって出来ている。あの海こそがその本体で、見えてるダゴモンは本当のデジモンじゃない」

「そ、そうなのかい？」

「彼。タケルがそう言ってるんだ。それが本当かどうかわからないけど。タケルは十年前にもここに来たことがあるらしい。きつと僕ら、デジモンやそのパートナーを脅かすためにデジモンの形を取ったのだろう、この海にはそういう色んなデジモンのデータもどこかから流れてきてて」

アンゴラモンは耳がいい。全て聞き取れてるらしい。

「でもそれがずっとアップデートされてないみたいだね。ダゴモンはデジモンとしては完全体。当時ではそこそこ強い部類に入っていたかもしれないけど、今はもっと強いデジモンがいくらでもいる。パタモンも、つてあの小さいデジモンのことだね。前に来た時はアーマー進化までしかできなかったけど、もっと強い形に進化できるんだ。ダゴモンはまるで怖くない。それに、自分だけじゃなくて他の世界でダゴモンを倒した人たちにも来てもらった」

「ぼくたちのことか」

「だけじゃないですよ、先輩」

宙が指差す方を見ると、四角いゴーグルの上に髪を逆立てた少年と小さな青いデジモン。明石タギルとガムドラモンだ。さらに女性やサブマリモンもいる。

「デジモンクロスウォーズ、という世界から来たそうです」

アンゴラモンが軽く片手を上げて、静かにと示した。

「観念するんだね、さもないと、みたいなことを言ってる」

その言葉が終わらないうちにタケルの横のパタモンが光を放ち始めた。

「いつまでも戦い、終わらないねえ」

幾重もの城壁を打ち破った先の岩の上に太一たちがいる。今は待ちの時間だ。アグモンに太一が答えた。

「まだまだこれからさ。でも、負けるわけにはいかない」

太一がいうのは今この戦いが終わっても敵がなくなるわけではない。それはデジモンだけではなく、現実世界との戦いもあることを意味している。

「オレたちを信じている人たちがいる限り、な」

ヤマトもこれまで戦ってきた仲間、救助してきた子供たち、その家族たちのことを思い出している。

二人ともその活動で随分悲惨な現場も目にしてきた。内戦や紛争に巻き込まれた地域にも行った。子供の救助がどうしてもできない場合もあった。自分の力不足だと慟哭する太一。先に心が折れそうだったヤマトは自分の感情をうまく外に出せないでいたのが、その太一によってかえって救われた気がした。そうでなければヤマトが壊れていたにちがいない。それ以来の太一は子供達を絶対に救うことを最優先にしている。あまりの決意の固さに、一時期は保護区の子供に怖がられることもあった。少し経って表面上は少し軽めの言動を装うことも覚えた。だがわずかでも異変を察知すれば本気の表情に戻る。場合によってはかなり苛烈な手段を使うこともためらわない。その太一がヤマトとガブモンを信頼していることもわかってる。二人と二体はずっと前方を見据えてる。

暗い空の彼方からインペリアルドラモンが飛んできた。

巨木の下に空いた穴が、デジタルワールドに時々出現するワープ地点のような現象をおこしていて、この森の近くに繋がっていたのだ。

巨大な竜型デジモンは太一たちを通り越して森の奥にそびえる黒い城に向き合った。ヨーロッパの巨城のような、しかし使われた石材はかなり黒い。

インペリアルドラモンの背中のドームにいる賢と大輔は不思議な感じに囚われていた。

「この城、何度も見たような気がする」

「おれもだ」

光子郎の推論ではその城が全ての黒いデジモン、ダークタワー、黒い歯車などの発生源だ。直接デジモンたちを送り込める距離に九龍城寨、巨木の下を通ってアラモ砦に闇の力を送り出してはいたはず。

「じゃあ、行くぜ」

インペリアルドラモンが大口径のレーザーを発射。城はその一撃で吹き飛び、炎が広がったあと黒い煙が空高くまで伸びていった。その中に影が見えてきた。

「メガデス！」

インペリアルドラモンから超質量の暗黒物質が放出された。眼前に立ち上る黒煙が吸収されていき、その奥にいたものが姿を現す。全身をフードのあるケーブに包まれた巨大なデジモンだ。高さは百メートル以上あるのではないか。メガデスはその中に吸い込まれてしまった。

「やっぱりあいつか」

「前よりも随分でかいな」

フードを被ったデジモン、デーモンはその本体を見せないまま両腕をゆつくりと広げていく。

「来るぞ！」

「避ける」

デーモンの前面から暗黒のエネルギーが放射された。それに当たれば全てが消滅する。巨龍はかわした。エネルギーが通り過ぎたあとに、長円のクレーターが形成された。その奥からこちらに向かつて来るものたちが見えてきた。二つの砦を襲った黒デジモンたちを討伐し終えたデジモンたちだ。

デーモンの足元の岩場にいる太一はそれをゴーグルで確認した。

「がんばるよ、オレ」

ガブモンがかまえた。全身が光り始める。

「頼りにしてるぞ」

ヤマトが答えた後にアグモンもかまえ、光り始めた。

「任せといて」

「よーし」

太一が腕を上げた。

「行くぜ！」

二体のデジモンが進化、ウォーグレイモン、メタルガルルモンとなって巨大なデーモンに向かって飛びたつ。多数の世界のデジモンたちが後に続いた。

霧の奥にダゴモンの影がうねうねと蠢いている。全身から触手のようなものが伸び、数倍の大きさにまで膨れ上がった後、一つの形にまとまって行く。二対の翼、異様に長く伸びた腕。

「デーリジャンモン。究極体だ」  
アンゴラモンが呟いた。

タケルはひそかに微笑んだ。隣にはパタモンが進化した天使型デジモン、エンジェモンがいる。

「タケルさん」

声に振り向いた。伊織とアルマジモンがそこにいた。

「伊織、来たのかい」

「療養所は助けの人たちで大丈夫だからって、送り出してくれたんです。こっちにもサブマリモンがいるんですね」

伊織は水際にいる女性とそのデジモンを見たあとデイーじゃんモンに向く。

「あのおぞましいデジモンが相手ですか」

「ああ。でもはつきりとデジモンになったからね。本当にデジモンなのかどうかわからないものよりは相手にしやすいはずだよ」

そういう狙いだったのか、と聞いていた宙たちは理解した。

「もちろん全力を尽くさないといけないけどね」

「では、行きましょう、アルマジモン！」

「ラジャーだぎゃ！」

アルマジモンはアンキロモンに進化し、エンジェモンとジヨグレス進化を始めた。

「他の世界から来た皆さんも、よろしくおねがいます！」

宙たちのデジモンや、明石タギルのガムドラモンも進化をはじめた。

デーモンは二〇〇二年の暮れに大輔たちが戦い、その強さに当時の大輔たちの力では倒すことは出来ず、やむなく別世界に追放したデジモンだ。追放先のダゴモンにいる暗黒の海は、当時は通常のやり方ではゲートを開けない特殊なところだった。デーモンもそう簡単には出てこれないだろう。しかし、いつかは来る。そして現実世界なりデジタルワールドなりに脅威を及ぼすことになるはずだ。太一たちはその心構えは忘れてなかった。

暗黒の海にはタケルやヒカリ、賢だけではなく西島や姫川マキ、ルイまで関係したらしい。それもあって、ルイたち「別の時間や世界の記憶を持つものたち」が黒い闇の力の尖兵ではないかとも考えたのだがそういうわけではなかった。彼らはマーカーとして利用されたに過ぎない。

十一年の時を経てそのデーモンがついに復活してきた。

おそらくは暗黒の海を利用し、力を十分に蓄えて続けていたのだろう。黒い歯車をはじめとして十年以上前に使われた道具がつかわれたのもその頃のデータからの再利用だ。それらは小手調べに過ぎず、本体は黒いデジモンの大量生産だった。そして、デーモン本体も数倍強力になっている。大輔たちは地上に降り、インペリアルドラモンは竜型から戦士型に姿を変えた。

「十年前の宿題、おわらせてやるぜー！ー！」

大輔たちと共に降りた他の世界のデジモンたち、巨木の穴を通ってきたものたち、メタルグレイモンとワーガルモンが切り開いた道を通ってきたものたち、全てが総攻撃を開始した。しかしデーモンの巨体に大してダメージにはなっていないように見える。

「デーモンには元々本体はないのかもしれませんが。通常の攻撃では意味がない。さらに暗黒の海からのエネルギーを得てます。そのルートを絶てば勝機をつかめる。それはおそらくあのローブの中にあるはずです。ただし、別世界同士を繋いでいる道です。データ化される世界になるかもしれません」

光子郎の推論に基づいて、太一、ヤマトとウォーグレイモン、メタルガルルモンはデーモンの衣服の奥の空間に潜っていた。そこに肉体はなく、物理的な空間ですらない。完全な闇としか見えない世界で方向を定めるのに光子郎が開発したゴーグルの新機能が役に立った。闇のデジモンの力の周波数を感じするのだ。

「あそこだ！」

二体のデジモンが集中攻撃して、突破口を開いた。太一が手を伸ばす。闇が開き、白い空間へ飛び込んだ。デジモンたちは究極体から成長期にもどってしまった。

「ここからだ」

「俺たちの本気を見せてやるぜ」

巨大な遮光器土偶のようなデジモン、シャッコウモンはエンジェモンとアンキロモンがジョグレス進化した姿だ。デイージャンモンの攻撃を吸収し、無効化していく。宙たちのデジモンたちが究極体にまで進化し、デイージャンモンを追い詰めた。しかしなかなか決着がつかない。

暗黒の海の上空に光が差した。天に穴が空いて光芒が溢れている。そこから白く細身のデジモンがマントを翻しながら下降してきた。アグモン、ガブモンたちが進化したオメガモンだ。肩に太一とヤマトがいる。

オメガモンは左手の剣を振りかざし、デイージャンモンを両断した。すぐに上の穴へ向けて右手からエネルギー弾を発射。穴の奥の白い空間はひとたまりもなく碎ける。

同時に地上のデーモンもそのローブが散り散りになって消えていった。戦いは終わった。

「ぼくたちが別の世界に戦いにいった記憶は、やっぱり本当だったんですね」  
光子郎は温かいお茶を飲んでる。

「ゲンナイさんから連絡もらった時はまだ半信半疑だったんです。いまだに時間軸や時系列がはっきりしません」

「まあいいじゃないか、とにかく今回は助けてもらったんだし」  
太一たちは研究所に戻ってきていた。屋上や療養所からも。この応接室が人でいっぱいになるのは初めてのこともかもしれない。

「で、きみが」

太一がルイに近づいた。

「ルイくんと、ウツコモンだな」

「ウツコモン！？ どこに」

「いるじゃないか。その右目」

応接室にいた一同はルイの右目を見た。長くした前髪に隠れがちな右目。その普通の眼球の上を白い何かが覆っている。

「それが本体なのか、一部なのかわからないが、もういいだろう。ルイに本当のことを伝えても。そのためにお前がいつまでも悪者になってることはない」

「一体、なにを。どういうことなんです」

太一はゆつくりと説明をはじめた。

ルイの母は寝たきりのルイの父の介護に疲れ果て、無理心中をはかった。ちょうどその時にウツコモンが現れてルイの命は救った。だが、まだその時のルイは両親のこゝろを受け止めるには幼なすぎた。ウツコモンは自分がいろんな能力を持ったデジモンだと信じ込ませるために、ルイに世界最初のパートナーデジモンを持つ子どもだと思わせる道を選んだ。その後時間をかけて数年分の生活の記憶を作った。その上で、悪いのは両親ではない。ウツコモンだという結末を用意した。ルイはそれで両親を憎まずに済んだ。

「今日も助けに来てくれた中に、松田タカトって人がいたはずなんだ。その人と前に会った時、そっちの世界ではデジモンに近いけどデジモンそのものじゃない、デジノームってのがいるって話を聞いてた。さっき思い出したよ。お前もデジモンというよりそのデジノームとかに近いかもしれない。でも、もういいだろう。ルイは幼くない。そろそろ本当の人生を歩ませてやれよ」

ルイの右目から大量の涙が流れ落ち、右目を覆っていた白いものは消えてしまった。

他の場所でのこの世界と、別の世界から人やデジモンたちはそれぞれの別れをしていた。丈は最後まで白衣のマミーモンにデジモンの医療について聞いていた。

しばらくして、メノアがルイと話していた。

「私は自分のパートナー、モルフオモンを探しにデジタルワールドに行くわ。ここでの研究もあとはいじーに任せて良さそうだし。ニシジマのリハビリが済んだらヒメカワマキもそうするそうよ。あなたははどうする？」

「自分のパートナーデジモン、ウツコモン。本当にいるのかどうか」

「そんなの行ってみなきゃわからないわよ。モチヅキメイもずっと前から行ってる。まだ見つからないけど諦めないって」

「それもそうですね」

結局ルイも行くことにした。ゲートに入る前に、ルイはタケルに一つだけお願いがあるのだけど、と切り出した。

「前に車の中でずっと話してくれた、子供の頃の冒険のことなんですが」

「ああ、あれかい。長い話になっちゃったよね」

「そんなに他の人には話してないんでしょうか」

「あの時は時間があつたからたくさん話してきたけど、なかなかそういう機会ないから全部話すことはあまりないなあ」

「あれ、すごく、いい話だったんです。人とデジモンがどう一緒に生きて行くか。今でもパートナーデジモンを持つ人は増えてるんでしょう？ その人たちに、伝えるとすごくためになると思うんです」

「でもそんなたくさんの人に話すことも」

「では、本に書くのはどうですか。文章なら翻訳して他の国の子供でも読めるし。大人でも」

「そうだね。考えとくよ」

そうしてルイとメノアはデジタルワールドに向かった。二人とも初めて行く世界だ。広い草原の向こうから、二人を迎えるようにたくさんのお蝶が飛んできた。

「タケルくくく、これで終わり？」

パソコンに打ち込んでるタケルのそばで見えていたパタモンが口を挟んだ。

「まあ大体ね。何か気になるかい？」

「あの、最初の北欧の少年のこと」

「ああそうだった。でもあれはまた別の話だからね」

「そうだったっけ。じゃ、楽しみにしてるよ」

おわり